

創刊120周年

# 幼児の教育

2021  
春

— since 1901 —

子ども学の源流を次世代につなぐ

第  
二  
号

第  
三  
〇  
巻



ほら。

面白いよ。

こんなふうに重ねたよ。

写真

子どもの情景 1

目次 まご

創刊120年を記念して 2

特集

創刊120周年記念

『幼児の教育』120年。

未来に何をつなぐのか 1

保育史と出会った奇跡

―『幼児の教育』のバックナンバーを

検索したら驚いた 4

《座談会2021》

浜口順子・久保健太・宮里暁美・阿部祐美子

5

実践

保育をつなぐ

～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～

Vol.9

附属幼稚園と大学―研究・教育の

パートナーとして―

小玉亮子

20

連載

「育ての心」で語りあう

～動画を囲んだDX時代のカンファレンス～

Vol.1

子どもに任せて「場所」になる

鈴木秀弘・池永憲彦・久保健太

26

視点

からだの対話とからだ育て

山上亮

32

初めての海外生活の地ミャンマーの教育環境

芳賀啓介

36

A児の表したもの

～表現の指導について考える～

杉浦真紀子

40



# 目次

表紙の図柄は、1901年に創刊された弊誌第1号の表紙図柄(荒木十畝・画)をデザイン化したものです。

## 視点

大人が読みたい絵本

― かかり合いの知恵を求めて

菊地知子

44

## 文化

鎌倉おもちゃ屋物語 その9

黒須和清

49

## 探究

言語景観からみる子どもの言葉の発達を  
促す教育環境

― フィンランドの幼児教育現場からの示唆 ―

矢田明恵

61

## 子ども学のことば

ナーサリーこぼれ話

イベント・メディア情報

読者投稿・編集後記 他

62

## まど 創刊120年を記念して

『幼児の教育』創刊120年を記念して、この春号から表紙を一新した。1901年に『婦人と子ども』という誌名で刊行された最初の号の表紙(本誌P5参照)を飾ったデザインをアレンジしたものだ。画家・荒木十畝(当時、東京女子高等師範学校の美術教師)の作による花模様の図柄は今も美しく、時間の流れを温かく感じさせてくれる。

120年前の流行語を調べてみた。「20世紀」社会主義―そして「鳩ほっぽ」―。エレン・ケイの『児童の世紀』発表翌年の1901年、「鳩ほっぽ」が社会にどんなインパクトを与えたのだろう。作曲は滝廉太郎。作詞家の東くめは『婦人と子ども』の創刊者、東基吉の妻である。小難しい雅楽調ではなく、子どもが口ずさみやすい新しい歌詞を東は紡いだ。その60年後、つまり60年前(1961年)の流行語はというと、「地球は青かった」と並んで「巨人・大鵬・卵焼き」「現代っ子」―。「現代っ子」は教育評論家の阿部進(1933-2017)の造語だという。受験競争にもまれ、きょうだいの多かった時代の子どものたちの悩みに「全国どこも電話相談室」で答え、共感を得ていた。

「子ども学の源流を次世代につなぐ」は引き続き表紙に掲げつつ、いざ2021年目へ。(浜口)



特集

創刊120周年記念

# 『幼児の教育』120年。 未来に何をつなぐのか 1

1901(明治34)年、『幼児の教育』は『婦人と子ども』という誌名で産声を上げました。

以来120年、本誌は変わりゆく日本の幼児教育・保育を見つめてきました。

この120年の間に、子どもも変わったのでしょうか。

あるいは、子どもは子ども、いつも変わらずにそこにいるのでしょうか。

今年は、「120年の大人と子どもの関係」を本誌の歴史と共に振り返っていきます。

今回のテーマ：

## 保育史と出会う奇跡

### —『幼児の教育』のバックナンバーを 検索したら驚いた

読者の皆さんは、この120年間の『幼児の教育』のバックナンバーを、今すぐ手軽に、自由に検索して読めることをご存じでしょうか。

1世紀以上の時を超えて、明治期の保育者の思い、あどけない子どもの姿、戦争や災害の中で思い悩んだ研究者、わが子の幸せを願う親たちと、すぐに対面できるのです。今回は『幼児の教育』をSNSで検索して読んだらこんな120年と未来が見えてきた、という話をしてもらいました。



## 座談会 2021

### 『幼児の教育』の バックナンバーを検索したら 驚いた

浜口順子  
久保健太  
宮里暁美  
阿部祐美子  
(発言順)

#### 『幼児の教育』の120年

浜口 今年2021年は、『幼児の教育』創刊120年です。それで、この春号の表紙は、創刊号の表紙（荒木十畝／絵 画像1）をリメイクしたものにしました。今日は、その120年の歴史を振り返るといいう意味でも、昔の記事をいつでも手軽に引き出して読むことのできるアーカイブズ・サービスについて皆さんと自由にお話ししたいと思います。

久保 昔の記事を手軽に検索して読めるのはとても貴重だし興味深いです。創刊

号の表紙を見たときは驚きました。美しいし、モダン。120周年の新しい表紙にピッタリだと思います。1901（明治34）年の創刊時は『婦人と子ども』という誌名でしたね。

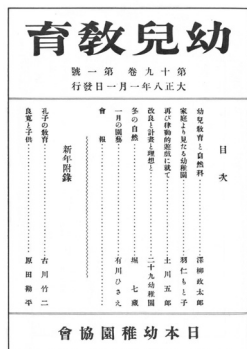
浜口 はい。『婦人と子ども』から始まり大正時代には『幼児教育』（画像2）、『幼児の教育』と名称を変え、今に至っています。おそらく日本で一番長く発行され続けている雑誌です。東京市（当時）の幼稚園関係者の研究会と東京女子高等師範学校（女高師）の保母会とが1896年に結成した「フレーザーベル会」の機関誌としてスタートしました。お茶の水女子大学（以下、お茶大）の前身である女高師の、中村



▲画像1 創刊号の表紙  
(1901年)

浜口順子（お茶の水女子大学）  
宮里暁美（文京区立お茶の水女子大学こども園園長）

久保健太（関東学院大学）  
阿部祐美子（区議会議員。元教育専門紙記者）



▲画像2 第19巻第1号 (1919年)の表紙。誌名が『幼育教育』となった頃。

惣三、堀七蔵、再び倉橋惣三、戦後は津守真、本田和子、田代和美らが編集責任者のバトンを渡してきました。戦前は日本の保育界の言論をリードする雑誌だったと言えるでしょう。現在は、保育雑誌が多々ある中のひとつで、だいぶ小規模にはなりませんでしたけれども、子どもが生き生きと生活する保育を実現させるために、身近なノウハウよりも、じっくりと保育を振り返り考えるきっかけとなる材料を提供し続けてきました。表紙に「子ども学の源流を次世代につなぐ」とありますように、過去と未来をつなぐ現在、という視点をもつことが編集上の基本姿勢です。

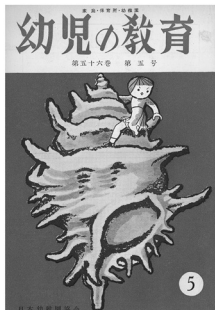
五六と東基吉という研究者が初代編集者でした。以後、和田実、倉橋

宮里 オンラインでバックナンバーが読めるようになったのはいつ頃からだったでしょうか。

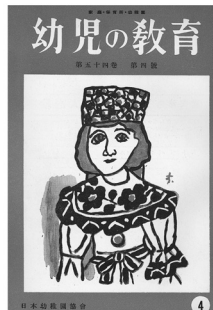
浜口 10年ぐらい前からお茶大図書館ですべて電子データ化し、無料で公開し、今は世界中の国々からアクセスされています。もちろん日本国内からが一番多いですが、中国、オーストラリア、アメリカなどからのアクセスも多いようです。オンライン化に踏み切るとき、こんなに貴重な歴史的資料をあつさり無料で公開していいものか私も迷ったのですが、元編集責任者の津守先生や本田先生にも相談し、特に反対されなかったので決心しました。2011年(110周年)に保育学会で、『幼児の教育』をテーマに自主シンポジウムをやったのですが、昔の広告や表紙を見るだけでも面白いのです。鈴木信太郎さん(画像3)とか武井武雄さん(画像4)、岩崎ちひろさん(画像5)など……。



▲画像5 第60巻第5号  
(1961年)の表紙  
(岩崎ちひろ 絵)



▲画像4 第56巻第5号  
(1957年)の表紙  
(武井武雄 絵)



▲画像3 第54巻第4号  
(1955年)の表紙  
(鈴木信太郎 絵)

宮里 最近は、附属幼稚園にあるステンドグラスをデザイン化した図柄の表紙でした。その原画を見たことがありますよ。季刊に変えたときからですね。浜口 10年前、季刊誌にしたのも勇気ある決断でした。月刊誌としての長い歴史がありますから……。出版事情も悪くなり、だんだん発行部

数も少なくなってきた、いろいろと迷った時期もあるのですが、附属幼稚園やこども園、ナーサリーという学内の三つの乳幼児施設の先生方と話しあい、やっぱり続けていこうということになり今に至っています。若手・ベテランを問わず保育現場の当事者（保育者、保護者、支援者など）の文章を出すほか、研究者の論考、歴史的視点のものなどを意識的に載せるようにし、それからこれは倉橋惣三以来の編集方針なのですが、幼児教育分野に限定せず、異分野の方にも投稿をお願いします。つまり、広い視野から幼児教育を考えられる雑誌にするよう心がけて作っています。

3年前からは、研究者の卵による若葉のような研究やチャレンジ的な研究を、査読付きで発表できる場を設けました。

### 保育者の言葉をつなぐ

久保 ここ2か月ほど、時間を見つけてはTeag



ポチ（お茶大図書館HPリポジトリサイト）でアーカイブズを読んでいます。先ほども1920年、つまり100年前の『幼児の教育』を読んでいたら非常に感銘を受け直しました。実践者の幼稚園の保母さんたちが、当時「保母」と名乗ってますけれども、文章を書いている。その頃は今よりも保育者自らが書く雑誌が少なかったのだと思います。その新鮮さもさることながら、全国津々浦々の保育者たちが「こういうことが自分の園で起きたのですよ」と投稿している。そのネットワークがすごいなと思いました。鹿児島から倉敷から東北から。1920年の2月号でしたけれど。大分の2月と東北の2月は全く景色が違うのでしょけれど、そういうのが同じ雑誌にあつて。ところで、幼稚園の数は当時どのくらいなのでしょう。1920年は、幼稚園は全国にどのくらいあつたのでしょうか。

浜口 『幼稚園教育百年史』（文部省）によると、

1920年頃は728園、園児数は約6万2千人。5歳児就園率2・8%です。1926（大正15）年には6%になります。

久保 どのぐらいの数の幼稚園の人が読んでいたのでしょうか。発行部数とかはわかるものなのでしょうか。

阿部 創刊50周年（1951年）の号に、幼稚園、保育所と合わせて全国4000ぐらいで、1施設に1冊ぐらいの割合で読まれているという記述があつたので、4000部くらいでしょうか。

久保 1園1冊ですね。

宮里 倉橋先生は、よく日本中を回っていらつしやいましたよね。

久保 それも驚きました。大体夏の7、8月ぐらいになると、倉橋惣三さんがここを行脚しますという日程表が『幼児の教育』に載っていますよね。本当に全国を歩いていったんだなど。この日は大阪にいますとか。それも僕にとつ

ては新鮮だったんです。まず全国の幼稚園の皆さんが『幼児の教育』という雑誌でつながっていることも新鮮でしたし、保育者の先生たちの登場回数が多いこと、研究者に依存しない登場の仕方であること、保育者自らが書く書きぶりが今よりもずっと盛んだったこと。これらを知って、強い感銘を受けました。

**浜口** 作っている側としてはそれが当たり前になっていったんだけど、あらためて言っていたらとそうですね。できるだけ元の文章を活かそうというのも私たちのモットーです。

### 保育者として書く機会を与えられて

**宮里** 『幼児の教育』の歴史を聞きながら考えていたのが、『幼児の教育』がなかったら私は今ここにいなかったということ。大学を出て、縁あって静岡大学教育学部附属幼稚園に勤めて保育者になったわけですけども、大学では幼児教育のノウハウよりも幼児教育の真髓

を学んだ感じなので、現場に入るとわからな  
いことだらけ。その後、東京都の公立幼稚園  
に勤めたのですが、そこでもめちゃくちゃな  
保育者でしたね（笑）。そんな私を『幼児の教  
育』が救ってくれたように思います。「保育の  
話を書いてみない？」と原稿依頼を下さるん  
ですよ。子どもの生の姿があると面白がつて  
くれる。成功談を聞きたいわけではないと。  
なんだか久し振りに子どものことを書きなが  
ら、自分らしさを取り戻した感じがしました。  
そうやって書いた原稿を編集の方々が興味を  
もって読んでくれて……。皆さんいい方たち  
なんですよね。（1984年10月号に掲載）

### 日々の思いを語る場として

**宮里** もう一つ『幼児の教育』では「耳をす  
まして 目をこらして」という2ページの小  
さなものを2年間連載させていただきました  
（2000～2002年）。自分にとって非常

に意味があつて、今の私をつくつている、自分のスタイルができた連載でした。保育者である私の個性みたいなものは消さなくていいということ、そこにあなたがいるんだからと『幼児の教育』が私に言ってくれたような気がしています。そこからいろいろな機会を得て、今は大学の教員にもなつている。ありのままの保育語りからすべてが始まつたなと思つています。

**阿部** この頃は毎月発行なんですよ。

**浜口** そうです。季節の移り変わりの中で保育者が日々を綴るにはいいペースだったのかもしれません。今のように季刊になると、そうはいかないのかな。

**宮里** 保育のありのままを表現する機会があったのはうれしかった。感謝しかないです、『幼児の教育』には。

**浜口** 書く場があるから書く、ということもありますよね。そういう場は明治期の『婦人

と子ども』という誌名だった頃からあつたようです。日本の明治期の保育は、机に座つて恩物ばかりだったと一辺倒に考えられがちですがとんでもなくて、当時の保育者たちが自分たちの心で感じ頭で考えて、子どもを大切にする保育をしていたことの証言とも言える面白い記録が載っています。

**アーカイブズを読んで驚いた**

**阿部** 幼児教育という意味では私は素人で、対談に寄せていただいてよいか迷いました。でも、浜口先生からTea Potでバックナンバーが全部読めるという話を伺つて検索してみたんです。検索のインターフェースは、ちょっと硬い感じですね。

**浜口** はい、それは私も感じていました。

**阿部** 本当に全部そろつていて、いろんな意味でとても面白かつたんです。第一に、古い時代の『婦人と子ども』の頃は読み物としてご

く面白い。この頃はこういう物語を語っていたんだとか、かなの表記に至るまで新鮮に感じました。題材の作り方も、こういうふうな語りかけをしてこんなふうにもと言葉遊びをしていたんだとか、クイズもあつたりして、読んでいるだけでも面白いなあと思いました。第二に、120年の歴史の中のさまざまな時代の空気を伝えてくれます。例えば、戦争。その頃には、どういうふうにも子どもたちに、あるいは親御さんに話していたのだろう。一般の歴史の本では当時の幼児教育がどうだったかはなかなか扱われませんよね。けれども雑誌はちよつとフランクな部分がある。本にまとめると、後世まで読まれることを意識して一般化してしまうものも、雑誌はその時の空気がダイレクトに残るんですよ。顔見知りの方々に語りかける形で残るので、逆に歴史的な資料として伝わるものがあつて、良いなと思いました。

浜口 いろいろな使い方がありますね。

阿部 それから最近の保育の本は「how to」に偏りがちです。『すぐに役立つ』とか『3分でわかる』とか。けれど『幼児の教育』を読むと、何気ない風景の中にもいろんな研究の蓄積があつて、先生方はこういうことを考え、設定しているということが伝わってきます。これは、保護者にとつても貴重です。親としては、よく食べた、ケンカして泣いたとか、仲直りしたなどの出来事だけでなく、もつと何でもないことの中にもいろいろな教育が詰まっていると気づけるわけです。そのことが保護者と現場の先生方の信頼関係につながるのではないのでしょうか。

### アーカイブズを検索してみた

久保 僕も共感しました。阿部さんは、どういう検索ワードを入れてみたんですか？

阿部 まずは「倉橋惣三」さん。あとは年代



で取ってみたい。「戦争」でも検索しました。  
**久保** 僕も同じように浜口先生に「Tea Pot」を  
教えていただいたから。倉橋惣三さんが亡く  
なって追悼号が出る（1955年）までを一遍  
にプリントアウトして読んでみました。19  
40年代からひたひたと戦争が始まっていつ  
たんだという空気が伝わってくるんですよ  
ね。1944年の休刊直前のもを見てみる  
と、「大東亜戦争必勝完遂」という言葉が『幼  
児の教育』の中にも登場してきて。雑誌だか  
らこそ伝わる空気を、まさに阿部さんがお  
っしゃるように僕も感じたんです。確かに、本  
ではなくて雑誌だから、というのがありますよ  
ね。ちょうど同じ頃、保母養成所の生徒募集  
の広告がたくさん載っていたりして。どうい  
う思いで保母を急募していたのだろうと思っ  
て。倉橋先生、編集部の皆さんは「大東亜戦  
争必勝完遂」とか書きたかったのかなとかね。  
誌面には子どもたちの姿がたくさん出てくる

わけですよね、ああいうのを読むと切なくな  
ってくる。勝手にセンチメンタルを感じてい  
るだけかもしれないが。他の媒体で見ると  
りも、ずつとシビアに時代の空気をキャッチ  
することができる。阿部さんの言うように雑  
誌がもつ歴史的な意味を実感したり、まさに  
オンラインになったから可能になった体験だ  
というの僕も感じます。

**宮里** 歴史をたどるのは本当に面白いです。  
例えば幼稚園教育の中で輪つなぎはいつ頃から  
やっているのかと思つたときに、実践記録の  
何気ない記述の中に「輪つなぎを作つた」と  
いうのを見つたりすると、お！と思う。キ  
ーワード検索をしてもヒットするときがある。  
『幼児の教育』が封じ込められている大事な時間の  
記憶は旅するに値すると思います。

### 授業にアーカイブズを使う

**浜口** 今、学部で3年生ぐらいを対象にした

10人ぐらいのゼミで、『幼児の教育』を検索して、なるべく1960年よりも前のものを、何でもよいから自分が面白いと思うものを読もう、ということにしているんですね。すると、例えば最近だと、1957年の「共稼ぎ家庭における児童」という（今は）著名な児玉省さんと宮本美沙子さんが書いたものを選んできた学生がいました。母親が働きに出ると子どもに悪影響があるという結果になっている研究調査なんですね。母親は家において子育てに専念するべきだ、という価値観が垣間見えるので、学生は全体的に批判的に受けとめました。でもゼミでは、60年前は研究者もこういうことを書く時代だったんだということを想像してみようと話しあっていきました。こんな価値観が違うのかと憤慨しながらも、でももし自分がこの時代に生きていたら？ という疑問ももつ。身近に自分事こととして歴史を感じるということでしょう。そこが極めて重要だ

と思います。短いものも長いものもあり、学生は興味のある検索ワードをかけて資料を探してきます。「今回はこの資料にします」と学生がメールなどでURLを知らせてくれば、次の授業までにすべての学生がダウンロードして準備してこられるので便利です。

**阿部** 学生さんが何を面白いと思うのかを見るだけでも面白そうですね。

**浜口** そうなんです。予測できないものを持つてくる。私にとつて門外漢のテーマが選ばれることも当然あつて、「そう来ますか」とワクワクします。意外とそういう話題のほうがディスカッションは盛り上がりつつあるかもしれない。一緒に面白がれるからかもしれない。大学院でも十分使えます。

**久保** 今、「共稼ぎ」で検索したら、すぐ出てきましたよ。

**浜口** 今は「共稼ぎ」とはあまり言わず、「共働き」ですよ。なぜだろうと考えると、「稼

「ぐ」はお金目的だけど、「働く」はそれだけではないのでは、とか考える。女性の地位向上とともに、価値観も使う言葉も変わってきたことを実感する。でも意識は実はそれほど変わっていないかも……とか。戦前の文章だと旧字が多く、そんな勉強もおまけに付いてきます。

### 『幼児の教育』と保育研究

**久保** 話を戻しますが。身近なノウハウだけではなくて、真髓・根っこ・哲学の部分を語る事が、この雑誌の大事なところかなと僕は思っています。その点、皆さんと共感しています。また、先ほどの宮里先生のお話を伺うと、その人なりの書きぶりを面白がってくれる編集方針であることも大事だと思います。

**宮里** 私は、そこは本当に大事なところだと思います。

**久保** 誰でも書けるような文章ではなく、その人でないと書けない文章を書いている。そ

ういう文章が100年前のものを読んでいても多かったんだなど、話していて気づきました。東北の人と大分の人が同じ文章を書いて面白くないし。東北の人は東北の2月を、九州の人は九州の2月を伝えてくださって。自分が何に感動したのか、皆さんの話を聞いて確かめることができました。

**阿部** 久保先生のおっしゃる1920年代というところ、おそらく、幼児教育の研究はまだ若い分野じゃないですか。そうすると研究者の方もこの道50年みたいな方もいらっしやらないわけで、現場の方も肩を並べて、同じ目線で研究をしたり実践をしたりということができていた、というふうにも感じました。学問分野として蓄積ができていくと、研究者と実践者がだんだん分かれて社会を構成できるようになり、お互いに遠い存在になっていったのかもしれないですね。本来なら実践と研究は離せない分野だと思います。今のつなぎ方って何かあ

るのでしょうか。

**浜口** 幼児教育研究といっても、実験とか統計によって行う、現場から距離をとるものもありますし、その一方で実践研究というジャンルもある。『幼児の教育』の歴史を支えてきたのは、現場と研究者の距離が近い研究で、保育者や子どもたちから直接刺激を受けて理論化に挑んだ人たちだったと思います。日本保育学会が戦後、倉橋惣三を会長として設立された当初、最初の研究発表大会の論文は『幼児の教育』に掲載されました。その中には現場保育者のものが多く含まれています。

**阿部** 保育学会は記者時代に取材に行きました。熱気があつて、大きな学会で。テーマも幅広くて面白かったです。

**浜口** 現場の先生が年に一度のお祭りみたいな感じですがごく楽しんでいらつしやるし、研究者にとってはここで発表しないとという場所です。戦後、『幼児の教育』の歴史と、現場

と研究者の密接な関係を象徴する保育学会の歴史とが交差した形ですね。

### 保育の日常の中の研究

**阿部** 今の保育園は、保育士が研究するどころかすごく忙しい現場になっていて。なんとかしないといけない。現場の先生が振り返りながら、研究をしたり実践ができるのが本来の姿だと思うのですが。保育園を見ていると、特に先生方が一人ひとり研究の視点をもちながら実践することが難しくなっていると感じます。

**浜口** 『幼児の教育』は、そんな保育者にもちよつと保育を振り返ってもらうよすがになればというコンセプトで作られています。だから、ちよつとバッグに入れておけるサイズ、仕事帰りに電車の中で読むこともできるようにと、ずっと今の大きさです。

**久保** 幼稚園が振り返りの時間を、子どもた



ちが降園した後には工夫次第でつくろうとしているのは見受けられますけれども、保育園はより厳しいというのを感じますよね。

**宮里** そうですね。最近やってみたことですが、給食の時間に幼児クラスの担任が休憩を兼ねて事務室に降りて、私や施設長、主任がお母さんというかおばあちゃんという感じ子どもたちと食事をするというのを始めました。保育士同士、1時間程度の時間の中で食事をして語りあって、なんだかすつきりした顔で保育に戻ってくる感じがいいなと思っています。まだやり始めたばかりで、もちろん毎日というわけではありませんが。

**浜口** 「ノンコンタクトタイム」という名前がついて最近ようやく、保育者が子どもから離れる時間の重要性が注目されています。実際はその時間をチームワークと知恵でこじ開けている感じでしょうか。宮里先生の園では、「こじ開ける」というより、都合をつけあった

者同士、子どもも含めて、新鮮なりフレッシュ時間にもなっているような。

**宮里** 0、1、2歳のクラスでは、子どもたちが午睡しているそばで連絡帳をつけたり小声で打ち合わせしたりしています。呼吸チェックなどそばを離れない理由があつて。そこも少しの間代わってあげられたらもう少し明るい所で話せるようになると思います、手伝えるときは声をかけています。保育者は子どもをそばを離れないという使命感をもっているけれど、子どものそばを離れて語る時間って大事で、そのためには協力的体制と工夫が必要だと思ふ。

### 保育者と研究者のコラボレーション

**久保** 大学の先生が園のミーティングに足を運んで一緒にミーティングする、みたいなものは月に1回ぐらいやっているんですか？

**浜口** 学内の三つの園に大学の教員や院生が

出入りすることは多いですね。学生が観察実習やインターンシップで行くので、その園に学生の記録を戻しますし、保育者のほうから大学の授業に出張していただくこともあるので、互いに学ぶ機会になっています。

**久保** ハンガリーとスウェーデンを、ここ3、4年の間に視察してきたのですが、保育者だけで語りあう場もありながら、一方で大学の研究者も足を運んで、研究者と保育者と一緒になって語り合いをしているんですね。

**浜口** 『幼児の教育』の編集に携わった中村五六も主事（園長）だったし、和田実も倉橋も。津守真は園長にはならなかったけれど、皆、幼稚園をフィールドに研究してきた人たち。倉橋の誘導保育論の元にある系統的保育案は、当時の附属幼稚園の先生たちとの共同作業で成り立った研究で、『幼児の教育』に連載して発表されました。大正期、倉橋が主事になって書きためた保育論は逐次『幼児の教育』に連載

されますが、それを編集して『幼稚園雑草』にまとめたのは附属幼稚園の先生たちでした。津守は自分が幼稚園に入って観察した考察を「保育の体験と思索」として連載し、著書になりました。附属幼稚園だけではないですけれども、現場に入って自分たちの研究の肥やしにして、それを『幼児の教育』に発表するということが今まで続いてきた。お茶大の中でそういうサイクルができていたことが、『幼児の教育』にひとつの形となって出ている。倉橋のいまだに読まれている『育ての心』も『幼児の教育』に連載されました。短い文章が多く、この本は現職者の研修の導入に向いているなと思います。詩的なフレーズにインスピレーションを受けて、保育の日常について話しあうきっかけづくりになります。

しかも、ほとんど本誌に掲載されていたので、ダウンロードして読める。お茶大の社会人対象の研修授業（保育・子育て支援ラーニング

プログラム」はオンライン授業ですが、ダウンロード教材として活用しています。

**宮里** 保育者は保育を語ることが好きだと思います。語って聞いてもらえるだけで幸せな人だけでも、さらに別の視点で、保育者を尊重するという基本姿勢をもちながら別の視点を投げかける人がいると、保育を営んでいる人自身が、保育の中で感じ取ったことの価値の深さにもう一つ気づくみたい。価値を教えられるのではなく、そこに光を当てるみたいな感じがかかわってくれる研究者とのコラボが、豊かな実践を支えているのかなと。

**阿部** 実践の中に、研究者が意味を見いだしているわけですね。

**久保** 僕自身が教育哲学の出身なんですけれども、哲学はともすると言葉ばかり難しくくてちんぷんかんぷんな呪文みたいな言葉を話しているのではと思われがちなんです。しかし、もっと身近な言葉で、これはどういうことな

のだろうと一緒に面白がりながら世界を調べていくというのが本来の哲学です。最近、心理学的な実験、統計、数字で記述できるようなデータになるようなエビデンスが求められる、そうした学問がはやっています。でもそういう学問ばかりが威力をもつと、保育者の人がますます語れなくなるというのが、僕が抱いている危機感です。保育者が「私の言っていることは私の主観でしかありませんが」と前置きをして話し始めたりすることが多いんですよ。主観だから良いのではないかと僕は伝えていきます。保育者の中で、客観的なエビデンスを示さないとダメだという強迫観念に捉われている人が増えているように思えて、僕が危機感をもっているのはその点です。『幼児の教育』がもっている値打ちは、君が見つけた宝物を君の言葉で語って、周りのみんなで面白がるうよというスタンスにあると思っ

ていました。

## 新連載の新しい試み

**浜口** 今号から始まった新しい連載で、2次元コードを使って保育場面の様子のYouTubeが視聴でき、それを見ながら保育を語ろうという企画（本誌P26～31掲載「育ての心」で語りあう）参照）。誌面が平面から3D的に奥行が出てきた感があります。

**久保** まだ方法は試行錯誤中ですが、ここから先は読者の皆さんがコメントを寄せましよう、みたいなことができるのではと思っております。さらに保育者参加型を目指せるのではないかと思っております。

**浜口** そういう技術的なことに抵抗がない世代に読者層が広がっていくのが楽しみです。新しい研修の場づくりになれば。

**宮里** 日本保育学会も、保育者と研究者が学びあう会で、今年はオンラインでの開催ですね。皆で語りあうというところに意味がある。

5回目になるお茶大こども園フォーラムも3月下旬にオンライン発信になりました。

**阿部** 今日の座談会が始まる前は、私はどういうことを話したらいいのかしらとドキドキしながら参加したのですが、『幼児の教育』が保育者と研究者の方々の場として機能してきたということ、そこに哲学があったこと、目の前に流れないままに生き残ってきたことを知り、本当に有意義でした。世界的にはリベラルアーツが見直されている中で、日本でも哲学の大切さが再認識される時代が来ると思います。その日が来るまで、『幼児の教育』は哲学というものを大事にしなが生き続け、花開かせていただければと思います。

**浜口** 前向きに生き残りをかけてチャレンジする希望が湧いてきたところで。

（2020年11月14日 Zoomにて開催）



# 保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.9

## 附属幼稚園と大学 — 研究・教育の パートナーとして —

小玉亮子



「保育をつなぐ」お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信」は3年目を迎えます。本シリーズでは、附属幼稚園の3歳児、4歳児の担任、養護教諭、全体フリー、あるいは事務職員、さまざまな立場の職員が、そして学内保育施設の保育士さんがバトンをつないできました。第9回は、附属学校園とのかかわりが深い大学教員が、附属幼稚園と大学の関係について綴ります。

\*

### 共同で研究すること

東京都文京区にあるお茶の水女子大学（以下、お茶大）キャンパスの中には、大学だけではなく、附属幼稚園、附属小学校、附属中学校、附属高校、いずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園の6学校園があります。お茶大では、ここ10年ほど、異なる学校種が相互に連携して、研究・教育を進めていこうという動きが積極的になってきてい

小玉亮子（こたまりょうこ）  
お茶の水女子大学教授。

ると感じています。

もちろん、お茶大の附属学校園の共同研究の歴史は古いです。何しろ140年を超える歴史をもつ大学なので、附属の歴史自体も古いですから、当然です。そこまでさかのぼらなくても、最近の共同研究としては、1980年代すでに当時の文部省の研究開発指定校として行った研究が、幼小連携の先駆けとなる研究として注目されると思います。その他、やはり幼小連携として有名な研究は、2001年から3年間行った幼小連携の研究、また、2005年からの3年間の幼小中の共同研究は大変意義ある研究となりました。これらの研究を通して、「滑らかな接続と適切な段差」という言葉が紡ぎ出され、幼小連携ではなく、幼小接続という言葉で議論されたことは極めて重要だったと思います。お茶大が提案したこの理念が、その後の日本中の「幼小接続」研究の嚆矢となったことは言うまでもありません。

せん。

こういった共同研究の場に大学が参加できたことは、大学にとって大変幸運なことだったと思います。私が参加したのは、2010年から6年間実施された連携研究ですが、ここでは、文字通り、大学と附属学校園全体を巻き込んだ共同研究が推進されました。私はこの時から共同研究に参加したのですが、幼稚園と小学校と大学が共同研究者であることを意識するようになったことは私にとって大変貴重な経験となりました。当初の私は、幼稚園と小学校の共同研究の伴走するのが大学だというような意識だったかと思います。ところが、附属の先生方から、そんなことでは困ると、はっきりと私の姿勢を問うご意見を頂きました。私が実践の研究者ではないということもあって、少し腰が引けていたのかもしれないかもしれません。あるいは、自分ではできないのに人の実践を論評して自分の研究成果にする

ようなことはしたくない、という教育学者を自称する私の「教育学者批判」ともいうようなこだわりがあったのかもしれない。

## パートナーという言葉

とはいえ、共同研究に参加する中で、附属の先生方の率直な議論を聞きながら、少しずつですが、私は私のとるべきスタンスのようものを模索するようになりました。そのうち、私が少し落ちていく共同研究にかかわれるスタンスを指す言葉として、パートナーという言葉を見つけることになりました。「パートナー」は、夫婦や、婚姻関係にないカップルのことを指す言葉として使われることが多い言葉です。しかし、欧米では、このパートナーという言葉が、教師と親の関係のあり方を議論する上でキー概念となっているのです（詳しくは、小玉編『幼小接続期の家族・園・学校』をご覧ください）。パートナーと言う

ときには、どちらかがもう一方を指導するという発想はありません。

むしろ、共に主体として、互いに対等に相談しながら物事を進めるときに使う言葉です。今では、企業と企業が共同して事業をするときにもしばしば使われているように思います。そして、何より、私がこの言葉に魅かれたのは、パートナーという言葉が、相互に相手リスペクトして初めて成り立つ関係に他ならないというところです。それぞれの附属学校園が相互に、そして大学もまた、共同研究のパートナーなのだと思うようになるにつれ、附属の先生方の共同研究の場に参加することの居心地の悪さが消え、むしろ、共同研究を進めることが楽しくなってきました。そうすると私の中のこだわりも少しずつ消えてい



▲小玉亮子編著『幼小接続期の家族・園・学校』東洋館出版社 2017年

き、腰の引けていた私も先生方の議論について、私なりに参加していろいろと考えを巡らすことができるようになりました。と、殊勝なことを書いてきましたが、小玉先生は最初からいろいろ好き勝手を言っていたではないですか、という声も聞こえてきそうです。

## ツリーではなく、リゾーム

パートナーという言葉には、二者関係を指す言葉というようなイメージもあります。親と教師がパートナーだというときに、一人の先生と一人の親の閉鎖的な二者関係も思い浮かびます。しかし、教育の場を考えると、二者関係だけを想定しては、十分ではないと思います。むしろ、教師と教師といった同僚関係や、親同士の相互関係、さらには教師以外の学校にいる大人たち、地域の大人たち、そういった複数の人々がかかわりあって、教育が営まれていると思います。さらに、共同

研究におけるパートナーという言葉を考えるとき、教育にかかわる大人たちだけではなく、むしろ、探究している子どもたちこそ、研究のパートナーであるとも言えると考えられるようになりました。そう考えていくと、子どもも教師も親も、学校にいる大人たち、地域にいる大人たち、そういった人々が全部、共同研究のパートナーと呼べると思うようになってきました。

でもそう考えると、パートナーという言葉が何を指す言葉なのか、もはや何が何だか、ごちゃごちゃで訳がわからなくなってしまうなあ、と思ったりしておりました。そんなことを考える中で、出会ったのが、「リゾーム (rhizome)」という言葉です。これは、イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児学校と、そこにインスパイアされた世界の幼児学校について学ぶ中で、キーワードとして学んだ言葉です。ごちゃごちゃだけどつながっている。

そしてそこで、何かが起こっている。そういった状況を語る言葉として、リゾームという言葉がとてもぴったりののです。

フランスの哲学者ドゥルーズによれば、リゾームはツリー（Tree・樹木）と対比されません。樹木は、根を張って幹から枝葉が伸びていきます。中心があつてそこから枝葉が派生していく、図で示すとしたら系統樹のイメージです。それに対して、リゾームは、水平に広がる根と茎のこと（地下茎）で、中心もなく、多方面に絡まって伸びて、別の何かにつながっていくようなイメージです。

私がドゥルーズのリゾームという言葉から学んだのは、私たちが進めている共同研究は、どこかに特権的な中心があつて指令が出る、というような形式で何かが見えてくるような研究では決してないということでした。しかも、面白いことにリゾームは、つながりを語るのと同時に、切断も重要な意味をもつ、と

いうことがわかってきました。今、「絆」とか「連携」とか、つながることに価値を置く議論が盛んにされる時代になっているようにも思いますが、リゾームの概念には、つながることと同時に、切れることがもつ意味が重視されていることもわかってきました。

**異なるものが、つながりつつ切れる、  
切れつつつながる**

幼稚園という場に大学教員は異質なものです。でも、リゾームという概念を踏まえれば、異なるものがつながったり切れたりしながら、何かが生まれていく、というアイデアも浮かびます。附属学校園が行ってきた共同研究から「滑らかな接続と適切な段差」という名フレーズが生まれたのも、幼稚園と小学校という異質なものの出会いがあつたからではないでしょうか。

2018年のことになりましたが、附属幼稚

園の先生たちと一緒に、ロンドンの幼児学校の視察に行く機会がありました。ロンドン大学と共同研究をしている、シェリンガム幼児学校に行ったのですが、同じものを見ているのに、附属幼稚園の先生と私が見ているものが違っていることがとても面白くて、学ぶことが多かったのです。この時、まずシェリンガム幼児学校の校長先生からロンドン大学との共同研究の話聞き、別の日にロンドン大学の先生から幼児学校との共同研究の話をお聞きしたのですが、それぞれをファーストネームで語る話の中に（日本と異なるイギリスの風習だからですが）、それぞれのポジシヨンの違いの自覚と、そこに指導―被指導の関係が全くないことに、いよいよ私の考えは確信となっていました。

幼稚園の先生と大学教員の私は、異質なものであると言えると思います。異質なもの同士の出会いに生まれるものがあれば、それは

とてもうれしいことではないか、とと思っています。そもそも、考えてみれば、先生たちだって、一人ひとり、異なります。異なる人々がつながったり切れたりしながら、何かが生じてくる。まさに、子どもたちの世界も同様ではないか、と思っています。

現在、私は、附属幼稚園の研究開発の運営指導委員という役割を頂いています。口に出して言っていないませんが、内心、この委員名はなんとかならないものか、と再び居心地の悪さを感じています。でも、自分の中で、勝手に運営パートナー委員という言葉に置き換えて、何はともあれ、幼稚園の研究に参加して、いえ、幼稚園と大学の共同研究に参加して、これまで進めてきた保育とつながる研究を一層深めたいと思っています。



▲シェリンガムの幼児学校で。



# 「育ての心」で語りあう

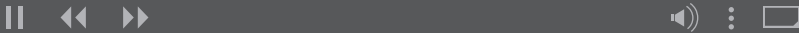
～動画を囲んだDX時代のカンファレンス～  
デジタルトランスフォーメーション



## ▶ Vol.1 子どもに任せて「場所」になる

2021年度から、「育ての心」で語りあうという新しい連載が始まります。この連載では、保育動画を囲んで、保育者、研究者、保護者、子どもに関心のある人、関心のあまりない人、いろんな人が語りあうということをしていきたいと思っています。

第1回の今日は「リヤカーを動かす子どもたち」の動画を囲んで語りあいます（右上の2次元コードから視聴できます）。メンバーは動画を撮影した和光保育園の鈴木秀弘さん。2歳の息子さんの父である池永憲彦さん。そして、教育哲学の研究者である久保健太です。（構成：久保）



動かしながら動かされている

（場としてのわたし、行為するわたし）

**鈴木** 今回の動画を研究会や懇談会で使うこともあるのですが、この動画は、主体というものがぼやけてくるイメージを皆で共有したいなど思うときに使います。言い換えると、それぞれ個別の存在でありながら、それぞれが動かされている。そんなイメージです。

少し難しい言い方ですが、主体が「動かす主体」ではなく、「動かされる主体」にもなっているんです。例えば、1分23秒のあたりで、アキト君が変身するんですよ。で、変身するのは、実はリタ君の「俺が力を貸してやる！」という声がかきつけになっているんです。この影響しあう感じ、わかりますか。もう一回、見てみましょう。（動画再生）

奥のアラタ君も、この二人の声や振る舞いに触発されて変身するんですよ。ほら、こい、

鈴木秀弘 わこう村 和光保育園（千葉県富津市）副園長。  
池永憲彦 レモン社長：リモンライフ株式会社 代表取締役。  
久保健太 関東学院大学教育学部専任講師。

変身しました（1分30秒のあたり）。

池永 本当だ。

鈴木 皆それぞれ主体なんだけど、影響を受けあっているわけです。

久保 研究者の視点からすると、今、（鈴木）秀弘さんがおっしゃったことは「行為するわたし」と「場所であるわたし」という木村敏さんの人間観と重なります。人間が世界にかかわることって、行為を通じて世界に働きかけることだと考えられがちです。例えばハンカチを畳むとか、ペンを握って書くとか。これらは全部、行為ですが、こうした行為主体であることをやめて、「わたし」が場所になることで世界とかわかることもあるんです。

池永 行為じゃなくて場所？

久保 そうです。私たちは世界に働きかける側ではなくて、働きかけられる側です。ユーミンの「やさしさに包まれたなら」（作詞作曲／荒井由実）の歌詞に「目にうつる全てのこと

はメッセージ」というフレーズがありますが、世界からのメッセージを受けとることで、さまざまな感覚が生じてくるという世界観です。

具体的には感動が生まれてきたり、快や不快の感覚、もしくは空腹感や暑さ寒さといった感覚が生

まれてきたりします。

その時、私たちは行為をするのではなくて、流れに身を委ねながらその流れが私たちの中を流れていて、それを感じている



▲1分25秒あたり、リタ君の一言がきっかけになって、ちょうどアキト君が変身しているところ。この後、奥のアラタ君も小さく変身する。左から、アキト君、リタ君、アラタ君、タケノリ君、タイケイ君、ケイ君、エイト君。

のです。

**鈴木** この動画って、「子どもたちが工夫してリヤカーが動いた」場面として理解されがちです。そうすると、ある一人の子が持ち上げたから動いたよねとか、ある子が押したよね、みたいな個々の働きの単純な因果論で結ばれてしまいます。しかし、子どもたちが生きている世界ってそんな単純じゃなくて、もっと複雑で、不可測で偶発的です。

この時はたまたま前に進みました。それはこの子たちが前に進めようという気持ちが見え和としてたまたまそろったからであって、もしかしたら下がるっていうほうにそろったら下がることもあったかもしれないし、横にずれるということもあったかもしれない。それってわからないんです。

だから、この子たちの相互関係や、偶発性が道を決めるというところにもう少し委ねてあげたほうが、実は最終的には個々の持ち味

がちやんと生きてきて、その響き合いが全体を活気づかせ、その全体の活力が、また個々の振る舞いに還っていく。そんな感じの、創発的な循環が起こりやすくなるのではないかと思っています。そのほうが、可能性としては開かれている気がします。

### 誘発しあって、物を動かす

**池永** 企業研修に使えそうな考え方ですね。一つのことに対して、自分たちが誘発しあって生まれた力で物が動くことって、みんなそれを目指しているのですが、なかなか難しい。でも、秀弘さんの話を聞くと、それは目指さうとすることではなくて、そのような場所や機会をつくるってことですよ。

**鈴木** おっしゃる通りです。久保さんが「場所」という言葉を使って説明してくれましたが、この場面では、保育者である僕自身も場所になっているんです。

そもそもこのリヤカーは、冬が始まる頃に、園庭に焚火端を作りたくて、それに必要な丸太を運ぼうと思って、僕が動かし始めたんです。そうしたら、「秀くん、秀くん」ってくっついてくる子どもたちがいて、その子たちが「俺たちがやりたい」って言いだしたんです。

池永 なるほど。

鈴木 「俺たち」って言いましたが、みんなが初めからやりたかったわけではなくて、最初を中心に居たのは、リヤカーの先頭を引つ張りながら「誰か力を貸してくれ」と言っている、タケちゃんって子です。この子がきつかけをつくってくれたんですが、それを面白そうだなと思った子たちが集まってきたんです。そういう時に、僕は「場」になるように心がけます。つまり、「この子たちがここに流れ込んできたぞ」と感じたら、いったん行為主体から外れて、「この流れがどうなっていくのかな？」という感じに、まずは委ねてみる

んです。その後に、もし僕に出番があれば、いい具合に流れるようにお手伝いしてあげたい、とも思います。

それを、「いやいや、俺がやる」って僕が行為主体になっちゃったら、子どもたちの「やりたい」というエネルギーの行き先が滞っちゃうんです。

池永 それは、本当に子育てと同じですよ。私の息子は2歳になりたてですが、最近はずを開けたがったりします。「うまくできるのかな」と思うのですが、最近はず、任せるようにしています。

私は慌ただしい日常を送っているのですが、ある程度「できそうだな」と思ったら、息子に任せることができるように、10分くらい余裕をもつようにしています。そうすると、息子もやろうとします。秀弘さんの話を聞いていると、私も「場」になるってことを、やっているかもしれないと思いました。

## これからの時代に

鈴木 少しわかりづらい言葉になってしまいかもしれませんが、僕は、子どもたち（人間）をエネルギー体として見ています。そのエネルギー体である子どもたちが、それぞれ主体として影響を及ぼしあいながら暮らしているから、当然、ズレや矛盾、葛藤もたくさん生まれてきます。その時に、出会ったエネルギーが塊になって、エネルギーの行き先がどうもうまく見つからないことも多々あります。しかし子どもたちって、自分でそのエネルギーを、より善い（いい塩梅の）あんばい方向に流そうとする工夫ができるんです。大人から見れば行き先が見つかるまでの試行錯誤は、不器用にも感じられますが、いったん流れ始めれば、とつても平和的で美しい秩序が生まれてきます。

そういう子どもたちの工夫や努力に、もっ

と頼ったほうがいいなと思っています。矛盾や葛藤といった混沌に耐えられないのはむしろ大人のほうで、だから大人は早く整理したくなっちゃうのですが、一見、整理されて気持ち良く流れたように見えても、子どもたちが自分たちでつくった秩序じゃないと、やっぱりどこかで最大出力まで上げられないところがあるんです。

僕たちがこれから向きあっていく時代は、新しい問題が次々と押し寄せてくる時代です。それらの問題と、次の世代は向きあっています。そういった次世代に対して、僕たちもっている「型」を教えるだけでは、新しい問題を乗り越える方法も、エネルギーも生まれてこないのだと思うのです。なので、目の前の混沌をどうやったらうまく流せるのか、その努力や工夫の中で生まれる流れ（秩序）を、自分たちなりに味わったり楽しめたりするような、時間や環境や「場」を用意してあ

げなくちゃいけないのだと思います。

## 自ら育つもの

**久保** 池永さんが語ってくれた、息子さんの鍵の話ですが、どうして「待つ」ことや、「10分余裕をもっておくこと」ができるんですか？ ぜひ、教えていただきたいのですが。

**池永** 参考になるかわからないのですが、倉橋惣三の『育ての心』という本の中に「自ら育つものを育てようとする心」っていう言葉があるんですよね。あの言葉がなかったら、待つことはできていなかったかもしれません。

**久保・鈴木** ああ〜！ へえ〜！

**池永** 子どもは自らが育とうとしている。大人は、それをサポートするだけ。そういう文章でした。そして、惣三さんの言葉の中に、一人の子どもとして見るのではなく、一人の人間として尊敬をもって迎え入れる、という言葉もありました。

この二つの言葉と出会ったことが大きかったと思います。忙しいときも多いですが、惣三さんの言葉のおかげで、なるべく子どもにやらせてあげたいという姿勢が前提になりました。

なので、今日聞いた話が本当にすっと入ってきました。食事のときでも「食べろ、食べろ」ではなくて、どう食べる場をつくるかということを私も考えていたんだと腑に落ちました。

**鈴木** その二つの言葉を聞いただけで、そうなるのはすごいですね。

**久保** 私も、池永さんのかかわり方は大変参考になりました。また、多くの人に倉橋の「育ての心」が拡がり得ることを実感できてうれしくも思いました。今後も、こうした語り合いの場をもたせてください。今日はありがとうございました。

**注** (きむらびん) 精神科医。京都大学名誉教授。



## からだの対話とからだ育て

山上亮

(整体ボディワーカー)

## からだと社会性

私は整体を生業としていて、個人に施術をするほか、全国各地の幼稚園の職員や保護者の方たち、あるいは子育てサークルの方たちなどに向けて「整体的子育て」と題した講座などを行っています。

そこでは、家庭でできる子どもの手当てや、からだを使ったさまざまなワークを体験してもらうことで、自身や家族のからだともっと積極的にかわる方法を学んでもらっています。そしてそれが日常生活の中で自然と行われていくことで、各家庭で子どもを中心に大人も含めた

「からだ育て」が実践されていくことを目指しています。

東洋思想ではもともと「心身一如」といって、こころの働きとからだの働きを一つのものとして捉える発想がありますが、私が「からだ」と平仮名で書いて呼ぶときは、そのようなニュアンスを込めています。

そして「からだ育て」とは、いわゆる運動能力の向上を目指す「競技体育」とは違った、共感力や感受力のような社会生活を営む上で必要となってくる身体感覚を育むことを目標とした、いわば「生活体育」とでもいうような、そんなからだを育てることを意識しています。

山上 亮 (やまかみ りょう)

野口整体とシュタイナー思想の観点から、からだの智慧を活かした生活を提唱している。著書に『子どものこころにふれる整体的子育て』(クレヨンハウス)など。

つい先頃（2020年11月）に発表された武蔵野大学の今福理博らの研究によると、からだの中の感覚に気づく「内受容感覚」が正確な人ほど、相手の笑顔に対して自然と笑顔になる「自動的な表情模倣」が起こりやすいという実験結果が得られました。

相手の笑顔に対して自然と笑顔で返す「表情模倣」というのは、円滑なコミュニケーションが行われるために非常に重要な行為ですが、それが身体性と関連してくるといふ今回の実験結果は、「人の社会性が身体に根ざす」という仮説を支持する重要な知見です。

そのような社会性をも含んだ身体、つまりこころも含めたさまざまな働きが営まれるプラットフォームとしての「からだ」というものをどのように育てるかということは、教育において非常に重要なテーマではないかと思えます。

## 家庭内でのからだ育て

講座に参加される子育て中の方たちとお話を

していると、「子どもにどう触れてよいのかわからない」「家族でお互いのからだに触れる習慣がない」という方にしばしばお会いします。

家庭というのは身体性を共有するコミュニケーションです。共に食べ共に眠り、そして具合の悪いときには共に看病しあう、お互いの身体性を持ち寄って付き合わせて関係しあっている、そんなコミュニケーションです。

そのようなコミュニケーションが健全に成り立つためには、そのグループ内で身体的なコミュニケーションが日常的に行われていることが非常に大切になってくるわけですが、現代社会ではそのあたりが少なくなってきているように思います。子どもが小さい頃は親子の間で比較的多く行われるでしょうが、子どもが大きくなってきたり、下の子が生まれてきようだい構成が変わったり、あるいは夫婦のような大人同士になると、頻度が減ってくる傾向にあります。

それにはさまざまな事情があるでしょうが、それでも家族でお互いのからだに触れあう何か

のきっかけになればと思つて、私はワークシヨップを通して、家庭ですぐ実践できる手当てやボディワークをお伝えしているのです。

それは、そのような身体的なコミュニケーションが、家族一人ひとりの健康を保持するというだけでなく、家族全体の健やかさといったようなものを維持するために非常に大切なことであり、そしてその「健やかな家庭」こそが、幼児の健やかな成長を支える土台であると確信しているからです。

## 皮膚ずらしのワーク

それでは実際に私がどんなことを家庭で実践したり皆さんにやってもらったりしているか、一つのワークをご紹介します。よろしくお願いいたします。

このワークでは、「皮膚をずらす」という小さな刺激を題材に、非常に細やかな

### 【皮膚ずらしのワーク】

- ① 2人組で1人が仰向けに寝て、もう1人がそのすぐ横に顔の方を向くようにして座る。(次ページ写真参照)
- ② 座っている人は寝ている人の胸の中央に軽く皮膚に触れる程度の圧でそっと片手を乗せる。
- ③ 胸に触れた手で、皮膚を上方向と下方向にそれぞれずらし、それぞれの感覚がどんな感じか寝ている人に確認する。
- ④ それぞれの感覚のうち、どちらか快い方、息のしやすい方を尋ねる。
- ⑤ 上下方向で快い方向を確認したら、左右方向でも同じように快い方向を確認する。
- ⑥ 上下方向と左右方向のそれぞれ快い方向と、その間の方向の3方向でさらに確認をする。(例：上と左だったら左上を追加)
- ⑦ 3方向のうち、最も快く感じる方向を確認したら、その方向へ軽く皮膚をずらしたまましばらくその感覚を寝ている人に味わってもらう。ずらす程度は快さを感じる程度。
- ⑧ しばらく(2～3分以上)じっと手を当てて皮膚をずらしたままボカンとしていると、無意識に力が緩んでゆっくり元の位置に戻ってくるので、戻ってきたらそこでゆっくりと手を離す。
- ⑨ もう一度、先ほどの3方向に皮膚をずらした感覚と、ただ手を当てるだけの感覚とを比べて確認する。手当てに満足するとただ手を当てるだけの感覚が一番快くなることが多い。

感覚のコミュニケーションを行います。小さな子どもや不慣れな方などは、初めはわかりづらく困惑することもあります。「なんとなくでよいから」「もし強いて言うとしたらどっち？」など、言葉掛けをしながら判断のサポートをしてあげると、徐々に自信をもって答えることができるようになります。

このワークは、自身の身体感覚に意識を集中することでリラックスする効果もあるので、これ自体が「手当て」という行為になってもいいですし、細やかな身体感覚にフォーカスを当てて感じ分けることで、内受容感覚を育てる「からだ育て」にもなっています。

また極めて刺激の小さなワークなので、生後数か月の乳児から（表情やしぐさで確認）、寝たきりのご老人まで行うことができ、身体的なコミ



ユニケーションのきっかけや拡がりとして幅広く応用できます。

そして、このワークの大きな狙いとして、このような繊細な感覚のコミュニケーションを家庭で行うことで、身体感覚という他人と共有しづらい主観的なものでも、対話のテーブルに乗せて他人とコミュニケーションできるといことを、子どもを含めた多くの人に体験してもらいたい、という思いがあります。

個人的で主観的な身体感覚というものを表に表してもよいということ。そしてそれは他者との関係の中できちんとして尊重されるということ。このワークを通じて、家庭の中でそのような体験を積み重ねていくことは、客観的な論理ではない、個人的な感覚を主とした「からだの対話」の作法を身につけていくことになります。そしてそのようなコミュニケーションが拡がっていくことは、それぞれの個性を尊重した「対話のできる多様性社会」を築いていくことにつながると、私は思っています。

## 初めての海外生活の地ミャンマーの教育環境

芳賀啓介

（会社経営者）

## ミャンマーでの幼稚園選び

妻と当時4歳と2歳だった息子たちを日本に残し、訪れたこともない国だったミャンマーに降り立ったのは8年前のことです。「よし、この国で生きていこう」という覚悟が固まってから家族を呼び寄せ、その後2人の子宝に恵まれ、今では12〜3歳の4人の子どもたちに囲まれ、事業のほうも、コロナ禍の厳しい状況ではあります。ですが、すぐに倒産する心配はない程度ですが、なんとか展開することができています。

結果的に子育て環境としても、苦勞もメリツトもいろいろと感じながら、ミャンマーで楽しく過ごさせていただいていますので、その一端をご紹介しますことができます。

通常海外で我々日本人の家族が子どもの学校を選ぶ際に選択肢となるのは現地校、インターナショナルスクール、現地の日本人学校の三つです。しかしここミャンマーでは、現地校に外国人が入学することはできません。したがって、二択になるのですが、長く海外に滞在する覚悟をもってきたので、インターナショナルスクールにお世話になろうと考えました。

私たち家族が来た2013年頃（当時5歳と2歳の息子2人）は、ミャンマーの民主化が始まって間もない頃で外国人がとても少なかった

芳賀啓介（はが けいすけ）

1979年神奈川県相模原市生まれ。しがない日本のサラリーマンから一決意してミャンマーに移住。グループ会社含め3社を経営。趣味は、野球とTシャツ作り。

ということもあり、学校の選択肢も非常に少ない状況でした。でもだからこそ、多様な人種のお友達が集まるインターナショナル幼稚園にお世話になることができました。

当時、日本から移住してきたばかりで、すべてのことが新鮮で、英語の環境に子どもたちが慣れてくれるのか、そもそも英語を理解できるようになるのか、大きな不安を抱えながらの入学でしたが、すぐに慣れてくれて、私たち親も驚くようなきれいな発音で英単語をすぐに覚えていく子どもたちに目を丸くしました。

民主化が進んだ最近では、さまざまな国から学校法人の進出があり、選択肢は増えたものの、欧米人はこのあたり、アジア系はこのあたり、ローカルはこのあたり、と、カテゴライズが進んでしまい、お財布事情によっては、本当に多様な環境に入れることが以前よりも難しくなってきたように思います。欧米人（つまりネイティブイングリッシュスピーカー）が多く通うグロバルブランドの学校法人は、幼稚園でも年間の

学費が100万円近くになり（そのまま持ち上がって小学生になると200万円、高校生になると300万円超）、会社や政府の補助がない私のような事業者にとってはハードルが高いです。

私たちが保育期において重視しているポイントはカリキュラムや設備等の環境もありますが、何より「多様性」。その点では、ここ数年で劣化してしまっているのかもしれない。

学校以外のところでは、家庭内でメイドさんに家事や育児の一端を担ってもらえる点は大変助かっています。妻も仕事を手伝ってくれていて、親類が近くにいるわけでもないので、手が多いのは助かりますし、5歳と3歳の娘は、親兄弟や日本人の友達とは日本語、幼稚園では英語、メイドさんとはミャンマー語、と、トリリンガルへの道を進んでくれています。

### 何語を子どもたちの第一言語とするのか

保育事情からは少し飛躍しますが、長男（現在12歳）と次男（現在10歳）は、彼らがそれぞれ

れ5年生、4年生の2学期に、インターナショナルスクールから日本人学校に転校しました。

海外子育てでよく話題になるのが、日本語も

英語も両方できるが、両方が中途半端になって

しまう、ということ。わが家でもいろいろな葛

藤がありました。前述の学費の問題に絡むと

ころもあって、ネイティブスピーカー中心では

ない環境での英語教育に限界を感じたのです。

彼らがインターナショナルスクールに通って

いる頃、よくよく聞くと、友人同士の会話で使っ

ている単語がとてもシンプルな単語にとどまっ

てしまっていることに気がつきました。会話と

しては必要十分なのですが、そういった単語レ

ベルでの会話をベースとしたときに、より深い

議論や思考ができるかという点、難しいのでは

ないかと考えたのです。さまざまな議論がある

と思いますが、思考力とボキャブラリーの豊富

さは、切っても切れないものではないかと考え

ています。子どもたちにとって、思考力の基と

なるボキャブラリーを育みやすい環境は何語な

のか。そういう観点で10歳前後以降の教育環境  
を選択し直す必要性を痛切に感じ、日本人学校  
へ転校することとなりました。

一方で、長女（5歳）と次女（3歳）は引き  
続きインターナショナル幼稚園です。海外に移  
住して8年たつ私も妻もいまだにネイティブス  
ピーカーの英語のヒアリングには苦労するので  
すが、その点で彼ら彼女たちは、さまざまな言  
語に触れているので、耳の聞き取りの可動域が  
広く、英語そのものへの抵抗感はなさそうです。

子どもたちには、世界を股にかける仕事をし  
てほしい。その際に言語のバリアーが限りなく  
低い状態で活躍してほしい。あらゆる言語の  
人々と友達になってほしい。私たちが少なから  
ず言語には苦労していますので、彼ら彼女たち  
には、言語の壁も文化の壁も感じずに、グロー  
バルに活躍してほしいと考えています。

### ミャンマー人の教育事情

私たちが外国人として享受できる教育環境と、



ミャンマーの方々の教育環境は大きく異なります。私たちが住んでいるヤンゴン（つまり都市部）では、半数以上の家庭が幼稚園に通わせられているようですが、地方では、幼稚園に通わせる家庭の割合は10%にも満たないそうです。また、小学校に上がると、90%以上の子どもたちが学校には行っているのですが、そのうちのほとんどが、学校での学習とは別に塾へ通っているそうです（地方ではもっと低い割合です）。というのも、授業内容が不十分で、授業時間も日本の学校と比べると少なめであり、学校は行くだけ。勉強は塾でする、という驚くべき現状。また、幼少期からアートや音楽、体育等の情操教育科目がなく、これからJICAも含めた外国のODA支援を受けながら整備が進み始めたところ、といった状況です。

国の根幹は教育だ、などとよく言いますが、治安も良く、倫理観も高く、素晴らしい人柄の方々が多い国なので、教育の改革が急務だと感じています。子どもをもつ親として、ミャンマ

ーでビジネスをさせていたただいている一人の日本人として、そういった現状を少しでも良い方向へ変えていけるよう、何か取り組んでいきたいと思っています。

そのひとつとして、私自身もシンガポール人が運営するモンテッソーリスタイルのインターナショナル幼稚園に、個人出資という形でお手伝いをしています。

ローカル向けへ教育理念等を伝えることになかなか苦労はしていますが、ご興味のある方はぜひご連絡いただければ幸いです。



<https://twitter.com/hagkeisk>

<https://www.facebook.com/hagabon>

\*この記事は2020年12月に書かれたものです。(編集部)

## A児の表したもの

## 〈表現の指導について考える〉

杉浦真紀子

(幼稚園教諭)

年中組から入園してきたA児は、初めての集団生活で、入園後しばらくの間は、母親と離れられずにいました。少しずつ園生活に慣れていきましたが、私に対して自分から要求してくることは少なく、教師から「何が好き?」「お外に行ってみる?」などと声をかけ、それに対してA児が首を振ったり、うなずいたりするといったやりとりが続いていました。

cverruu

そんなA児に変化が訪れたのは、その年の冬のことでした。年長児が毛糸でマフラーを

作ろうと指編みを始めると、その様子を見ていたA児が、私にほそつと「あれ、しってる」と言ってきました。年中児にとってはちよつと難しいかなと思いつつ、A児の心が動いた瞬間を逃してはいけないと思い、年長児のところに行って、毛糸を少し分けてもらうことにしました。A児の指に毛糸を掛けてあげると、A児はゆっくりと編み始めました。途中でわからなくなると、私のところに聞きに来て、そしてまた編み続けました。それが数日続き、家でもさらに編み足し、2メートルくらいの長いマフラーが出来上がりました。そ

の長く編まれたマフラーを首に巻き、端を引きずって歩く姿はなんとも誇らしげで、A児の言葉にはならない思いが、そこに表れていました。「Aちゃん、すごいね！」周りの声も聞こえてきて、A児の世界が少し広がっていくのが感じられました。



相変わらず言葉少ななA児でしたが、その頃から、「○○つくりたい」と言うことが増えました。A児が「つくること」に自信をもち、そこで自分を表現しようと動き始める姿を見て、私はA児の「つくること」をもっと支えたいと考えました。家族と水族館に出かけた経験から、イルカを作ろうと、材料と一緒に探していたこととす。私が「これはどう？」といくら見せても、納得がいくものに

出会うまでは決して首を縦には振らず、根気強く選ぶ姿があり、こんなふうには思いを強く表すようになつたこともうれしい発見でした。こうしてこだわりをもって作り上げたイルカをきっかけに、A児のそばには同じように作ってみたい友達が集まり、淡いながらもつながりが生まれていったことは、A児にとつての大きな転機だったと思います。

## 友達への思い

その後、新型コロナウイルスによる影響で、子どもたちの生活の場も休園を余儀なくされました。およそ3か月の自粛期間を経て、久しぶりに登園してきた子どもたちでしたが、憧れだった年長児とのお別れもできないまま、自分たちが園の中で一番大きい年長組へと進級していました。始業式でみんなとの再会を喜んだのも束の間、しばらくはクラスの半数ずつで登園することになり、仲良しの友達と

会えないこともありました。そのような中、A児は、S児の姿を追うようになりました。不安だった入園当初、園庭のお山と一緒に虫探しをしたことがあり、S児はA児にとつては抛り所となる存在のようでした。普段は仲良しの友達と元気に遊んでいたS児でしたが、分散登園になってからは少し元気がなく、A児は自分の意思で、そんなS児に寄り添おうとしたのかもしれませんが。

夏休みが近づいたある日、A児が保育室でひとりぼつんと座っていました。辺りを見回すと、S児は久しぶりに登園が一緒になった仲良しの友達と遊んでいるようでした。私は、A児の気持ちを察し、励ますつもりで「一緒に何か作ってみる？」と誘ったのですが、次の瞬間、A児の目から大粒の涙がこぼれて、首を振りながらうつむいたのでした。A児の中に芽生えた友達への思いは、言葉にしなくても十分過ぎるほど伝わってきました。この

時はとにかく、あふれてくる思いをありのままに表すことを受けとめようと、私はただそばで座っていました。

### 仲間と共にある

夏休みが明けて、全員での登園が再開し、子どもたちの暮らしに活気が戻ってきました。クラスでは、夏休みに捕まえたカブトムシやクワガタ、カエルなどを飼育ケースに入れて、園へ持ってくる人が増えました。また、園庭の草むらではバッタが飛び交い、子どもたちは虫捕りに夢中になりました。

そんな中、A児が、飼育ケースにカマキリを入れて持ってきました。友達に「どうしたの？」と聞かれ、「きのう、つかまえた」と、やりとりする姿に、私は正直、驚きを隠せませんでした。おまけに、友達が「見せて！」と集まってくると、A児はおもむろに飼育ケースに手を入れて、カマキリを豪快につかん



で見せました。周りは「お  
おっつー!」とどよめき、A児  
は次第に「カマキリを持つ  
る人」として、一目置かれる  
ようになっていきました。

秋が深まると、園庭の虫  
たちは姿を潜め、代わって  
ドッジボールが盛んに行わ  
れるようになりました。A

児は、保育室と園庭とをつなぐ三和土<sup>たたく</sup>に立つ  
て、園庭の様子をうかがっていました。私  
の誘いに乗ってはきませんでした。数日後、  
ドッジボールに一区切りがついたとき、園庭  
に転がっていたボールを手に取るA児の姿が  
ありました。私はすかさず、そのボールでA  
児と二人でキャッチボールを始めました。狙  
いを定めて投げようとするA児の姿には、力  
強さがにじみ出ていました。再び、子どもた  
ちが集まってきてドッジボールが始まると、

A児はそこに居続け、仲間たちとのドッジボ  
ールに交じっていききました。そして、それは  
翌日へと続きました。

また寒い季節が巡ってきました。A児の首  
元には、今年、新たに編んだ長いマフラーが  
巻かれています。

園生活の中で、子どもたちは身の回りのも  
の、ひと、ことに出会い、心を動かし、自ら  
こうしたい、こうありたいと、思いを表しま  
す。その表現はさまざま複雑です。だから  
私たちは、この子をもっと理解したい、その  
ために何を支えるべきかと迷いつつも援助や  
指導を重ねます。そこで大切なのは、表現す  
る子どもの心もちであり、それを感受し、自  
ら育つようにとかかわることだとあらためて  
感じています。

## 大人が読みたい絵本

## — かかわり合いの知恵を求めて

菊地知子

(保育士)

『ねえねえ、もういちどききたいな』

わたしがうまれたよること』

ジェイミー・リー・カーティス作、ローラ・コーネル  
絵、坂上香訳 偕成社 1998年

どのページも、「ねえねえ、もういちどききたいな。」と始まるこの絵本。主人公の女の子が、パパとママに話してほしいと繰り返しねだるのは、自分が生まれ、病院に駆けつけたパパとママと「家族」になったときの話です。この絵本は、いわゆるステップファミリーの物語で、養子であるこの子が、繰り返し聞いている自分の出生のときの話を、聞いてうれしい、聞いて安

心する話として私たちに語るのです。家族の形はいろいろであり、愛情の形も、こういう家族だからこう、とパターン化することのできないものであることを、私たちに教えてくれます。生まれたときの話や幼い頃の話、しかも、同じ話を子どもが何度か何度かしてもらいたがる、ということとはとてもよくあることでしょう。それについて津守房江は、「確かめること」という自著の一節の中で、「めざましい成長をする子どもたちにとっては、くり返し自分の存在の確かな基盤に立ち戻ることが必要なであろう。」と言っています。以下に、津守の経験した実際の場面を引用してみたいと思います。

子どもたちの好きだったお話は、この本の他にもいろいろあるが、その一つに、「小さいときのこと」がある。これは、自分たちの小さいときのことを、楽しい童話でも聞くみたいに、くり返し尋ねながら話すお話のことである。

「あたしの生まれたとき、髪の毛生えていた？」  
「いいえ、ふわふわの毛がほんの少しだけよ。」

「おとうさん、何ていったの？」

「赤ちゃんは髪がない方が上品だった。」

満足気に笑う姉に、妹が横から待ち切れずになぞねる。

「あたしは？ 髪の毛あった？」

「ええ、黒いふさふさした毛がたくさん生えていたのよ。」

「おとうさん、何て？」

「髪が黒くて立派だった。」

子どもはこの答を知っていて、期待した通りというように笑う。もう、この話を何回したことだろう。子どもたちは、自分が生まれたとき、

両親から待たれ、大切に受け入れられたことを、こんなにも楽しんでくり返す。人生の出発点の確かなときに、くり返し戻るのを見ると、くり返すということは、一つには確かめるためにする行動であると気づかされる。自分にとって確かな点に戻って、そこからまた出発しようとする。めざましい成長をする子どもたちにとって、くり返し自分の存在の確かな基盤に立ち戻ることが必要なであろう。

幼い子どもたちとともに生きているときは、楽しいことばかりではない。子どもがどのように成長していくか分らないままに、混沌のときを持ちこたえていくには、努力と共に精神力を必要とする。そのような日々を、分らないながらも一生懸命生きたとき、それは、子どもたちにとって存在の確かな基盤となっているのであろう。子どもたちがくり返し話す「小さいときのこと」は、大変だったことや、いやだったことも混ざっているのに、暖い思いに満ちてい



る。いま、幼い子どもたちと共に生きることが、子どもたちの人生の基盤を、しっかりと積み重ねていることである。

(津守房江『育てるものの目』 婦人之友社  
1984年より)

### 『タンタンタンゴはパパふたり』

ジャスティン・リチャードソン&ピーター・パーネル  
文、ヘンリー・コール 絵、尾辻かな子・前田和男 訳

ポット出版 2008年

イギリス在住の、保育士で作家のブレイディ  
みかこさんの超話題作『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社 2019年）  
の中で、多様性を語るためにイギリスの保育所  
では必置になっていると書かれている絵本で  
す。タイトル通り、ペンギンのタンゴの育ての  
『両親』は、互いに愛しあうパパたちです。卵  
をかえす他のカップルをまねして、石を温め続  
けるロイとシロの様子から、飼育員さんがそつ

と、他のカップルが温められなかった卵を二人  
の巣に置きます。すると二人は一生懸命卵を温  
め続け、ヒナをかえます。そうして誕生した  
のがタンゴです。タンゴと2羽のお父さんは動  
物園の人気者。夜になると、他のペンギン一家  
と同じように、動物園の他の動物や、この町に  
住んでいる私たちの家族と同じように、自分た  
ちの巣に帰り、すやすやと眠りにつきます。

ニューヨークの動物園で本当にあつたお話だ  
そうです。ロイとシロを心から祝福したくなる、  
とても胸を打つ作品ですが、何といつても私は、  
ロイとシロが愛しあっていることに気づき、卵  
をそつと巣に置いた飼育員さんの優しさに脱  
帽。本当にすてきなお話だと思いました。

### 『おかあさんになるってどんなこと』

内田麟太郎 文、中村悦子 絵 PHP 研究所  
2004年

うさぎのミミちゃんは仲良しのターくんと二

人で外に出て遊び始めます。モコちゃんというお人形を抱っこして、「わたし、きょうはこのこの おかあさんになるの」と宣言。「おかあさんになるって……、どんなこと」ターくんが聞きます。モコちゃんを子どもに見立ててお世話をし、看病もする中で、ミミちゃんには、一つずつ確かな答えが見つかります。

「おかあさんになるって、こどもの なまえをよぶことよ」「こどもと てを つないで あるくことよ」「しんぱいして おもわず ぎゅつと だきしめて おもわず なみだが であることよ」真つ向から「おかあさん」とか「ママ」をテーマにした絵本を取り上げることに、少なからぬ躊躇があります。この世界には「お母さん」「ママ」と呼ぶ人がいない子、失くした子もたくさんいますし、社会的文化的意識の高い人たちに旧態依然の母親像、家族像を是認するよう受け取られて叱られそうで気が引けたりもします。それでも私は、保育を学ぶ学生などにこ

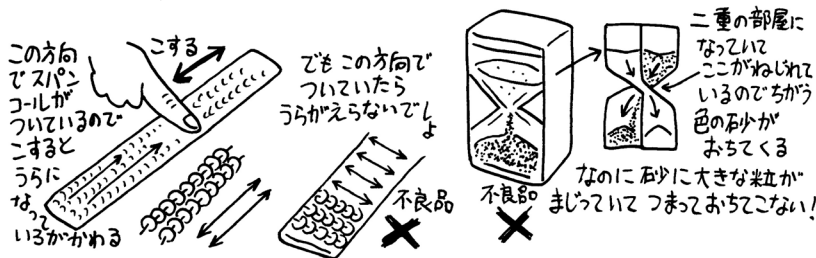
の絵本を紹介することがありますし、ここでも紹介しておこうと思います。「おかあさん」を「傍らにいる人、いようとする人、隣とな人」と読み替えて、子ども事こととして、また自分事こととして読んでほしい、と面倒臭い注文付きで、です。

「隣人」とは、本や映画のタイトルでもあり、その原作者である養護施設長、菅原哲夫さんによる造語です。具体的には、養護施設で寝食を共にし子どもに寄り添う保育士を指しています。ミミちゃんの出した答えは、子どもの傍らにあらうとする者が参考にするには、素朴過ぎるかもしれません。ですが、子どもにとつては、保育的教育的恣意や一方的な期待に満ちたまなざしを向けられるよりも、こういう人になら傍らにあつてほしいと感じるのではないかなと思います。

くちばしが水につかなければ水飲み運動は止まってしまいます。「えーっ！！」  
仕入れた5個全部試してみましたが同じでした。「なんだこりゃあ！」

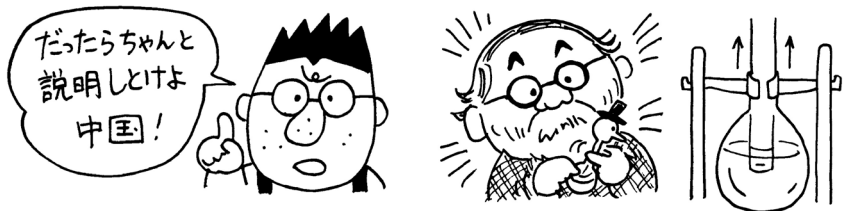
「きっとエーテルの量が少ないんだな。中国め、適当な仕事しやがって。見た  
目だけなんとなくまねて肝心なところを節約して。許せん！」

あんなに感謝していた中国を猛批判。以前「バク転力エル」のときにも話しま  
したけど、駄玩具には不良品が混ざっているのはよくあることなのです。こ  
するとスパンコールのビーズが裏返って色が変わるブレスレットとか、落ちる  
砂の色が変わる砂時計とか。



安ければそんなものかとあきらめもつきますが、ちょっと高価な科学おもちゃ  
が全滅なんてがっかりも甚だしい。やって来たヒゲだるまオーナーに散々グチ  
りました。オーナーも困ったものだねと渋い顔、でもしばらくすると

「治りましたよ！」えっ？ 奇跡！ なんとくちばしが水に浸かるようになり  
ました。オーナーは首のガラス管と足の金具をちょっとずらして頭の方を少し  
重くしたらしい。そんなことだったのかい！ さすがオーナー、快挙！ 病院  
ならサジを投げた患者を生き返らせた名医です！



だって解説書も何にも入ってないんですから。  
その晩、丁寧な解説書を作って、合格した5羽  
の平和鳥を梱包してそこに添えました。買った  
お客さんをがっかりさせないために必ず検品して  
商品に手を尽くす、それがうちの店なんです。  
だから仕入値980円の平和鳥が  
2500円なんです。高いですか？！



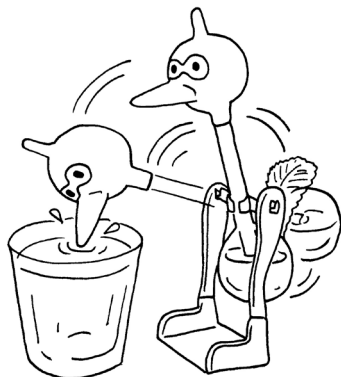
# 鎌倉おもちゃ屋物語

くろすかすきよ

その9

面白駄玩具の紹介と  
新米おもちゃ屋の  
どたばたエッセイ!

「平和鳥」って知っていますか？  
昭和に流行<sup>はや</sup>ってあちこちの店のウインドーに飾られていた科学おもちゃです。鳥が揺れると中のエーテルが少しずつ首のガラス管を上って頭の方が重くなるのでコップの水にくちばしをつける、その水が蒸発することで頭が冷えて頭の中の空気が縮むことでエーテルがまた上がっていく、くちばしがぬれている限り水飲みを続けるという仕組み、大傑作おもちゃです。でもこれがもう絶滅種！おもちゃ問屋の方の話だと鳥の体のガラス管を作る工場がその型を廃棄してしまったので二度と製造は無理とのこと。

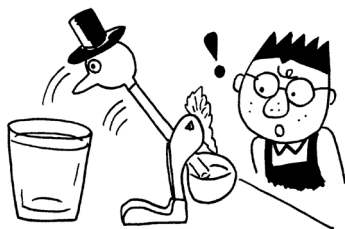


そのお店に残っていた5個を買い占めて1個を見本としてお店に置きました。くちばしが水につくときコップと首のガラスの当たる音が「チン！」お客の来ない静かな店内に響きます。一人の店番のときもなんか寂しくない。ペットを飼った気分です。朝イチで店に入ったときも動いていたりすると「こいつ夜通し頑張っていたんだなあ」といとおしくなる。



懐かしがるお客さんはやはりいて、残りの4個は次々売れてしまいました。もう手に入らないのは寂しい……ダメもとで探したらありました！さすがアマゾン。中国製で日本製より一回り小さくて、おしゃれに帽子などがぶっついています。日本のものをなんでも復刻して安く売る中国、ちょっとずるい気はするけどこんな絶滅種の命をつないでくれるのは感謝、中国さんありがとう！

見本用の一つ開けて試運転……ところが！  
「あれっ……??」くちばしが水につかない。  
くちばしが水に浸かる前にお腹のエーテルの水面からガラス管の先が出て空気が入り上がっていたエーテルが下に降りてきて頭が戻ってしまうのです。



黒須和清 1955年東京生まれ。横浜在住。  
洗足こども短期大学教授として手作りおもちゃや人形劇を教えるかたわら、ペーパークラフトや執筆活動、研修会講師の仕事などで忙しい。

- Gorter, D. (2013). Linguistic landscapes in a multilingual world. *Annual Review of Applied Linguistics*, 33, 190-212.
- 幡野由理・小田倉泉. (2010). 保育環境における壁面装飾の意義 II: 教育空間としての幼稚園の壁面装飾. 埼玉大学紀要, 教育学部, 59 (2), 69-78.
- 磯野英治. (2013). 言語景観を日本語教育に応用する視点. 日語日文学研究, 第86集, 韓国日語日文学会, 289-302.
- 正岡さち・團野真紀子. (2015). 『幼稚園・保育所における壁面構成』の事例報告. 鳥根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 49, 107-111.
- Närvi, J. (2014). Äidit kotona ja työssä: Perhevapaavalinnat, työtilanteet ja hoivaihanteet [Mothers at home and at work: Family leave choices, work situations and care ideals]. *Yhteiskuntapolitiikka*, 2014 (5), 543-552.
- Karila, K. (2012). A Nordic perspective on early childhood education and care policy. *European Journal of Education*, 47 (4), 584-595.
- 片山美香・伊藤智里・馬場訓子. (2020). 幼稚園教諭養成課程における領域「言葉」に関する専門的事項の授業内容の検討. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 10, 49-61.
- 文部科学省. (2017). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説: 外国語活動・外国語編. [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_011.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf) (2020年10月21日)
- 文部科学省. (2017). 幼稚園教育要領. [https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_3\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf) (2020年11月5日)
- 無藤隆. (2018). 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿. 東洋館出版社.
- Reyes, I., & Azuara, P. (2008). Emergent biliteracy in young Mexican immigrant children. *Reading research quarterly*, 43 (4), 374-398.
- Salminen, J. (2017). Early childhood education and care system in Finland. *Nauki o Wychowaniu. Studia Interdyscyplinarne*, 5 (2), 135-154.
- Shohamy, E., & Gorter, D. (Eds.). (2009). *Linguistic landscape: Expanding the scenery*. Routledge.
- Szabo, T. P., & Troyer, R.A. (2020). Parents interpreting their children's schoolscape: Building an insider's perspective. In Malinowski, D. & Tufi, S. (2020). *Reterritorializing linguistic landscapes: Questioning boundaries and opening spaces*. London: Bloomsbury Academic.

すものも多く、教育的意図や物理的教育環境の構成という認識は得られていないという指摘もある(幡野・小田倉, 2010)。日本の教員養成課程や教員研修でも、今後、スクールスケープの視点を取り入れていくことが、子どもの言葉や資質・能力を育む教育環境を創造する上で有効であると考えられる。

### 【謝辞】

本研究にあたり、貴重なご助言を頂いた石本穂乃さん(ユヴァスキュラ大学国際修士課程修了)に紙面を通じて心から感謝申し上げます。

### 【引用文献】

- Brown, K. D. (2005). Estonian schoolsapes and the marginalization of regional identity in education. *European Education*, 37, 78-89.
- Brown, K. D. (2018). Shifts and stability in schoolsapes: Diachronic considerations of southeastern Estonian schools. *Linguistics and Education*, 44, 12-19.
- Dressler, R. (2015). Sign geist: Promoting bilingualism through the linguistic landscape of school signage. *International Journal of Multilingualism*, 12 (1), 128-145.
- Eerola-Pennanen P., Vuorisalo M., Raittila R. (2017). Johdatus varhaiskasvatukseen [Introduction to early childhood education and care]. In M. Koivula, A. Siipainen, P. Eerola-Pennanen (Eds.). (2017). *Valloittava Varhaiskasvatus [Charming Early Childhood Education and Care: Learning, participation and wellbeing]*. Tampere: Vastapaino.
- Finnish Education Evaluation Centre. (2019). Tilastoraportti 2019 varhaiskasvatuksen järjestämisestä [Statistics report 2019 on the organization of early childhood education]. <https://karvi.fi/publication/tilastoraportti-2019-varhaiskasvatuksen-jarjestamisesta/> (2020年11月5日)
- Finnish National Agency for Education. (2017). *National core curriculum for early childhood education and care 2016*. Helsinki: Finnish National Agency for Education.
- Fjällström, S., Karila, K., & Paananen, M. (2020). A matter of universalism? Rationalities of access in Finnish early childhood education and care. *Nordic Journal of Studies in Educational Policy*, 1-12.
- Gorter, D. (2006). Introduction: The study of the linguistic landscape as a new approach to multilingualism. *International Journal of Multilingualism*, 3 (1), 1-6.

## 6. 考察

本稿では、子どもの言葉の発達や新ナショナルコアカリキュラムに示される資質・能力を促進する教育環境について、教育現場における言語景観（スクールスケープ）という観点から分析を行っていった。その結果、以下の4つの力を育むことを意図するスクールスケープが見て取れた。すなわち、1）言葉の発達や思考力、2）多文化理解および人と関わり表現する力、3）自立心や日常生活を送る力、および4）参加や環境に関与する力である。これらは、新ナショナルコアカリキュラムで示される（図2）、幼児期のうちに育みたい5つの資質・能力と密接に関連していた。壁面構成の起源は、元々は装飾であったと言われるが（正岡・團野, 2015）、本研究からは、教師や保育者の教育的意図のみならず、カリキュラムのねらいが強く反映されているものであるということがうかがえた。

言葉の発達や思考力に関する掲示物では、月齢の異なるグループで、それぞれ子どもの発達段階に応じて言葉や認知の発達を促す掲示物が見られた。年少児のグループでは、色や形、季節などに関連するものが多かったのに対し、特に5歳児が在籍する就学前教育グループでは、学校教育への接続を意識し、文字や数字に関する掲示物が多く張られていた。発達段階に応じた資質・能力の育成が今後の日本の学校教育の課題であると言われている（無藤, 2018）。保育者や教師は、子どもの発達段階を理解し、その段階に適した資質・能力を伸ばすような教育環境の構成を意識していく必要があるであろう。

多文化理解に関する掲示物では、図7に示された掲示物だけでなく、世界地図や異なる国の国旗などがほとんどの保育室で見られ、保育者が伸ばしたい資質・能力として意識していることが見て取れた。日本で令和2年（2020年）に全面実施となった新しい小学校学習指導要領では、教科としての外国語が導入されたにもかかわらず、新幼稚園教育要領では、多文化理解や外国語には触れられておらず、領域「環境」の中で、「国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること（p.15）」と記されるにとどまっている。しかしながら、今日、日本でも外国にルーツを持つ子どもは幼児教育の中でも増えてきており、また小学校での外国語教育へのスムーズな接続を考えると、幼児期のうちから、外国語教育の基礎となる多文化や多様性の理解のスキルを、資質・能力として育んでいく必要があるのではないかと考えられる。

無藤が言うように、幼児にとっては、環境で出会う全てのものが「教材」であることに鑑みると、幼児が毎日目にする掲示物や保育室内に配置されているものも「教材」である。保育者は、掲示物や教室の物理的配置においても、目的意識を持って行っていく必要がある。例えば、フィンランドのユヴァスキュラ大学の教員養成課程では、子どもの教育環境をスクールスケープの観点から捉える授業が開講されている。日本でも、保育内容の指導法の講義などで、壁面装飾の作成が行われていたりするが、にぎやかでかわいらしい空間作りを目指す





図9 0～4歳児グループの廊下に張られた掲示物 (2018年3月26日撮影)



図10 3～4歳児グループの入り口付近に張られた掲示物 (2018年3月26日撮影)

#### 5.4 参加や環境に関与する力に関する掲示物

最後に、フィンランドの新ナショナルコアカリキュラムでは、子どもの「参加 (participation)」というのが非常に重要視されている。掲示物は従来、張られているものを見る、という受動的なインプットを主としているが、このデイケアでは子どもが参加することを意図した掲示物もいくつか見られた。図11では、子どもたちの名前の裏にマジックテープが付けられており、様々な遊戯室の写真にもマジックテープが貼られている。子どもたちは、室内遊びの時間、自分はどこで遊びたいかを自己決定し、その部屋の写真の下に自分の名前を張り付けていく。一つの部屋で遊べる子どもの人数は限られており、その場合には子ども同士が交渉し合って、その日の室内遊びの活動を決めるという。このように、掲示物が子どもの自己決定や自己参加のツールとして用いられていることが分かった。



図11 3～4歳児グループの廊下に張られた掲示物 (2018年3月26日撮影)

レ横の壁面に設置された掲示物である。このグループには外国にバックグラウンドを持つ子どもが複数名在籍しており、その子どもたちの国の言語で色や挨拶などの名称が、フィンランド語と共に示されている。ここでは、その言葉を覚えるということよりも、世界には様々な文化や言語が存在しているということを理解することを目的としていると考えられる。

図8は、全ての保育室で共通して見られる掲示物があったため、筆者が保育者に質問をしたところ、様々な種類の掲示物を見せてくれたところである。これらは、「仲間に入れてもらう」「謝る」などのソーシャルスキルを絵と文字で提示したものであり、その時々の子どもの状況に応じて、適切なものを張り替えているという。また、一番手前の掲示物は、自分の感情を顔の表情と共に段階的に示したものであり、今自分はどんな気持ちや気分なのかを表現する時に用いるという。これらの掲示物は、デイケアに在籍する特別支援教諭の監督のもと、全グループで使って取り組んでいると話していた。

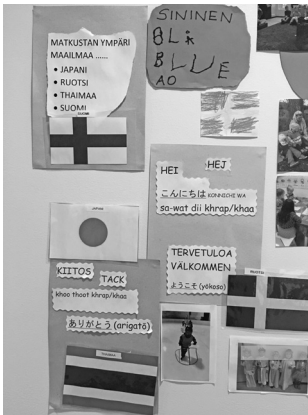


図7 3～4歳児グループのトイレ横に張られた掲示物（2019年4月26日撮影）



図8 全ての保育室に共通して張られていた掲示物（2018年3月26日撮影）

### 5.3 自立心や日常生活を送る力に関する掲示物

次に、身の回りのことを自分で行き、日常生活を送ることを手助けする目的で設置された掲示物に着目する。全ての保育室で、形状は少し違うが、図9および図10のようなその日の活動の流れが絵と文字で示されていた。年少児のグループでは絵を横並びにして時系列に分かるように、年長児のグループでは時間も書かれ、時間の概念が促されるようになっていた。これらが手がかりとして、子どもたちは次の活動が何かの見通しを立て、自分で身の回りのことや日常生活が送れるよう工夫されていた。

## 5. 研究結果

### 5.1 言葉や文字・数量などに関する掲示物

まず、言葉や文字、色や数量に親しむことを目的として設置されている掲示物を含むスクールスペースに着目していく。図3は、2歳児以下のグループの壁面に掲示された子どもたちの作品である。左から赤、青、黄色、緑で作られた作品が掲示され、色の概念の発達を促すことを目的としている。図4は、3～4歳児グループの壁面に掲示された子どもの作品であり、丸や四角などの形を用いた作品を作り掲示することで、図形への関心を促している。また、雪だるまをテーマにした作品は、フィンランドの3月ならではの季節感を表している。一方、図5および図6は就学前教育グループ（5歳児）の保育室に張られている掲示物であり、より数字や文字への認識を高めることを意図したものとなっている。

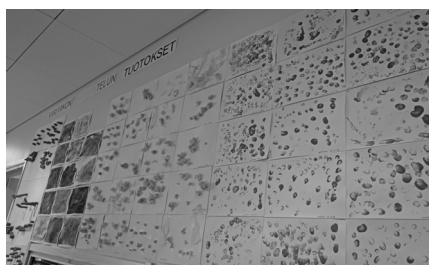


図3 2歳児以下のグループの保育室に掲示された子どもの作品（2018年3月26日撮影）



図4 3～4歳児グループの保育室に掲示された子どもの作品（2018年3月26日撮影）



図5 就学前教育グループの保育室に張られた掲示物（2018年3月26日撮影）



図6 就学前教育グループの保育室に張られた掲示物（2018年3月26日撮影）

### 5.2 多文化理解および人と関わり表現する力に関する掲示物

日本の幼稚園教育要領とフィンランドのナショナルコアカリキュラムでのひとつの違いは「多文化理解」について明言されているかどうかである。図7は3～4歳児グループのトイ

られる言語景観は、スクールスケープ (schoolscape) と呼ばれている。Brown (2005) によると、スクールスケープは教育と学習が行われる物理的・社会的場面で構成されており、カリキュラムや特定のメッセージが、公に示される象徴的な文脈を表しているとされる。すなわち、スクールスケープを研究することによって、その環境における言語イデオロギーが読み取れる (Brown, 2005) だけでなく、背景にあるカリキュラムや教師の思いなどを見取ることができると言えるだろう。学校や幼児教育施設などの教育環境に見られる掲示物は、模写の例などを示すことによって子どもの早期の読み書きスキルを促進する役割がある (Reyes & Azuara, 2008)。さらに教師は、子どもの言葉への興味や言語意識を高める目的で、教育環境における掲示物を用いている (Dressler, 2015)。まだ読み書きを学んでいない幼い子どもにとって、環境の中にある掲示物は書き言葉との初めての出会いの場であり (Dressler, 2015)、重要な意味を持つと考えられる。

これまでの先行研究では、スクールスケープから言語イデオロギーや言語政策の変遷を辿ろうとするものが多い (Brown, 2005; Brown, 2018; Dressler, 2015)。しかしながら今日では、スクールスケープを教育現場の教育戦略や実践を反映するものとして分析する研究も出てきている (Szabo & Troyer, 2020)。本研究では、言語発達の促進や言語イデオロギーのみならず、さらに概念を広げて、前述した新ナショナルコアカリキュラムに示される資質・能力を育成する教育環境が、スクールスケープから読み取れるかを検討していく。

#### 4. 研究の方法

2018年3月～2019年4月の間、筆者は複数回フィンランド ユヴァスキュラ市の公立Aデイケアを訪問し、教育環境の記録 (写真撮影) および保育者へのインフォーマルな聞き取り調査を行った。

Aデイケアは月曜日から金曜日の朝5時から22時30分まで開園しており、夜間保育も行っている。全部で6つのグループに分かれており、2歳児以下 (0～3歳) のグループが1つ、0～4歳児 (0～5歳) のグループが1つ (シフトケア)、3～4歳児 (3～5歳) のグループが3つ、就学前教育グループ (5歳児) が1つという構成になっている。

Gorter (2006, p.3) によると、言語景観における掲示物や標識は、二つの種類に分けることができる。一つは「トップダウン (top-down)」の掲示物であり、国や自治体、あるいは教育委員会などから公式に決められたものである。もう一つは「ボトムアップ (bottom-up)」の掲示物であり、内部の人 (すなわち教師や保育者) によって作られたものである。前者が言語政策や規制を反映しやすいのに対し、後者は教師や保育者のカリキュラムにおけるねらいや思いが反映されやすいと考えられる。従って本研究では、ボトムアップの掲示物のみに焦点を当て、分析を行っていった。

学前教育のカリキュラムでは、4.のマルチリテラシーとICTスキルが分けられ6つの資質・能力に、小学校教育のカリキュラムでは、「Competence for the world of work, entrepreneurship (ワークライフのためのスキルとアントレプレナーシップ)」が加えられた7つが育みたい資質・能力となっている。このように、幼児教育で強調される5領域、および幼児教育からその後の学校教育を見据えた資質・能力が示されているという点で、日本の要領・指針とフィンランドのナショナルコアカリキュラムは共通している。本稿では、図2に示される資質・能力を育むために、フィンランドのデイケアでどのような教育環境が整えられているのかを、言語景観という視点から捉えていく。

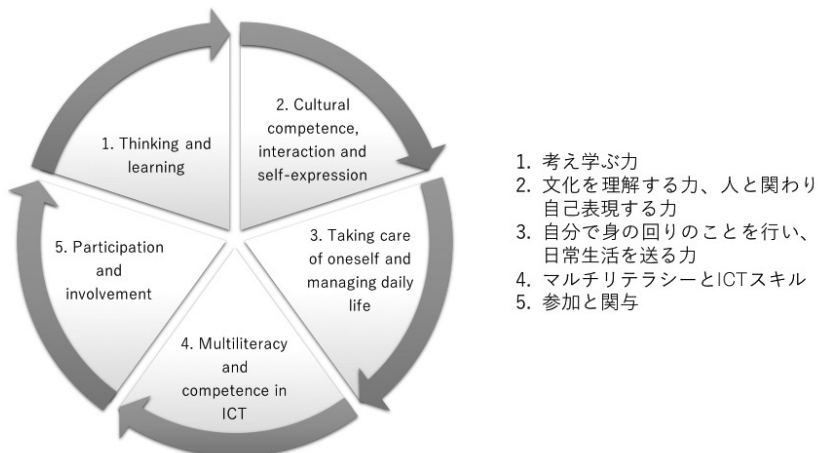


図2 フィンランドのECECにおける5つの資質・能力  
(Finnish National Agency for Education, 2017より筆者が作成したもの)

### 3. 言語景観とスクールスケープ

言語景観 (linguistic landscape) の研究は、日本でも地理学や社会言語学の分野で数多く行われているが、教育学の分野ではあまり見られないのが現状である。しかしながら、近年、教育学分野でも注目されるようになってきている研究対象・手法である (Szabo & Troyer, 2020)。言語景観は一般的に、環境の中にある言語、すなわち公的な場で提示される文字やイメージ (看板や掲示物、チラシ、ポスター、ラベル、ステッカーなど) に着目することと定義される (磯野, 2013; Shohamy & Gorter, 2009)。さらに今日では、テクノロジーの発展に伴い、LEDネオンサイン、電子掲示板、インタラクティブタッチスクリーンなど様々な形態のものが含まれるようになってきている (Gorter, 2013)。特に、教育的な環境の中で見

ものの発達段階に合った幼児教育がきちんと家庭でなされているのか、という懸念がある。また、家庭保育を行うのはほとんどが母親だが、母親が長期間仕事から離れた場合に、仕事に復帰するのが難しいといった課題もある (Närvi, 2014)。さらに、上述したように、幼児教育の運営は自治体に任されている (Fjällström et al., 2020)。従って、地域によってECECサービスに大きな差があり、経済的に余裕がある自治体は生涯学習を視野に入れた充実したサービスが提供できるが、地方の自治体では予算と労働市場のニーズに合わせて幼児教育を展開することしかできないのが現状である (Fjällström et al., 2020)。本稿で後述するデイケアのあるユヴァスキュラ市は、フィンランドの中でも比較的大きな都市であるとともに、教育学分野を牽引するユヴァスキュラ大学があり、大学と自治体の連携が活発になされている。ECECサービスとしては充実している方の自治体と言えるだろう。本研究で取り扱う事例が、フィンランド全体に一般化できるわけではないことに留意する必要がある。

## 2.2 新ナショナルコアカリキュラム

フィンランドでは、2014年に就学前教育および小学校における新ナショナルコアカリキュラム (日本でいう学習指導要領) が、2016年にはECECにおける新ナショナルコアカリキュラムが制定され、それぞれ制定から2年後に施行となった (Salminen, 2017)。この三つのカリキュラムの制定は、ECEC、就学前教育および小学校教育で同等の教育の質を目指すものであり、3歳以下の幼児教育も「教育システム」の対象と位置付け、目的意識を持ってデザインされた環境の中で、幼児教育と保育を提供することを意味している (Salminen, 2017)。日本では、幼児教育における5つの領域と幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿、および幼児教育と小学校以上の学校教育で育まれる資質・能力の3つの柱が共通で提示されている (無藤, 2018)。フィンランドでも、ECECで強調されるべき5つの領域とECECで育まれる5つの資質・能力 (transversal competences) が示されている (Finnish National Agency for Education, 2017)。まず、ECECの新ナショナルコアカリキュラムで強調される5領域とは以下である。

- 1) Rich world of language (言葉の豊かな世界)
- 2) Diverse forms of expression (多様な表現方法)
- 3) Me and our community (私と私たちのコミュニティー)
- 4) Exploring and interacting with my environment (環境の探索と関わり)
- 5) I grow, move and develop (私は成長し、動き、発達する)

これは日本の新幼稚園教育要領に示される5領域「言葉」「表現」「人間関係」「環境」「健康」に類似したものとなっている。その上で、図2に示される幼児期の終わりまでに育みたい5つの資質・能力が明記されている (Finnish National Agency for Education, 2017)。就



が制定され、5歳児（5～6歳）への就学前教育（エシコウル）の義務化などが行われることとなった（Salminen, 2017; Fjällström et al., 2020）。この管轄の移行は、幼児教育も他の学校教育と同等の質を保障し、幼児期から学校教育さらにその後の生涯教育への移行をスムーズにすることを旨とするものである。

フィンランドでは、幼児教育をどのように運営するかは自治体に任されており、幼児教育サービスがどのように提供されているかは地域によって大きな差がある（Fjällström et al., 2020）。図1は、フィンランドのECECシステムの概要を示したものである。フィンランドにある295の自治体に行った2019年1月の調査では、自治体が運営する公立のデイケアを利用する子どもは70.9%、公立の家族デイケアを利用する子どもは6.8%、そして公立の開放デイケアや子ども広場を利用する子どもが4.0%と示されている（Finnish Education Evaluation Centre, 2019）。

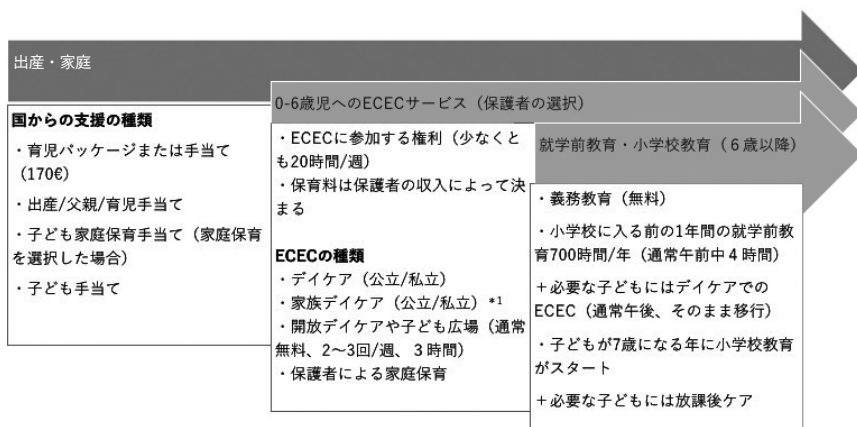


図1 フィンランドのECECシステムの概要  
 (Salminen, 2017より抜粋し、筆者が補足を加えたもの)

\*1 家族デイケアとは、トレーニングを受けた保育ママが、多くの場合自分の自宅で最大4人（自分の子どもを含むこともできる）の子どもの保育を行うもの。公立・私立共に自治体の管理下に置かれ、家族デイケア同士や公立デイケアとの連携も行われている（Salminen, 2017）。

このように、フィンランドでは保護者のニーズに応じて様々な形態のECECサービスが提供されているが、いくつかの課題も見られる。例えば、家庭保育を選ぶ保護者の多くは学歴が低い、または労働市場における地位が低い家庭であるという指摘がなされており（Närvi, 2014）、その場合、特に3歳以下のきょうだい児がいる4歳以上の幼児について、その子ど



児教育に参加する権利を保障した国である (Karila, 2012)。第二に、後述するように、フィンランドでは幼稚園と保育園の区別はなく、日本のこども園のような幼児教育施設 (パイヴァコティ) があるのみである。2013年からこのパイヴァコティ (以下、デイケアと表記) は社会保健省から教育文化省の管轄に移行され、Education (教育) とCare (保育) を両立する複合施設として発展してきた。従って、三つの幼児教育施設で同質の幼児教育・保育を保障しようとする日本にとって、すでに実践を行ってきたフィンランドの取り組みを知ること、何らかの示唆を得られるものと考えられる。第三の理由として、フィンランドは古くから、幼小接続の重要性を考慮し、幼児教育と小学校教育をつなぐ独自の就学前教育 (エシコウル) を展開してきた。幼児教育をその後の学校教育さらに生涯教育を見据えて行うフィンランドにおいて、どのような教育環境が整えられているのかを見ることは、幼小接続が一層の課題となる日本に有益な情報を与えるものになるだろう。

## 2. フィンランドの幼児教育

### 2.1 幼児教育の歴史と現状

1863年に設立されたフィンランド国内初のフィンランド語教育教師養成学校 (現ユヴァスキュラ大学) のセミナーの一環として、フィンランドで最初の幼稚園がユヴァスキュラ市に開園されたのが同じく1863年のことである (Eerola-Pennanen, Vuorisalo & Raittila, 2017)。その後20年にわたり、いくつかの幼児教育施設が設立されたが、最初の公立幼稚園がヘルシンキに設置され、フィンランドの幼児教育の正式な始まりとされるのが1888年である (Salminen, 2017)。フィンランドの幼児教育発展の歴史は、北欧諸国における男女労働機会均等の歴史と深いつながりがある。1970年代、女性の社会参加が積極的に推進され、良質で安全なケアを子どもに提供する施設の確保が急務となり、公立の幼児教育施設が広く設立された (Karila, 2012)。1990年には、全ての3歳までの子どもを持つ親が、地域のデイケアを利用するか、あるいは家庭で面倒を見てchild home care allowance (子ども家庭保育手当て) を受け取るかを選べるようになり、1996年には、この権利が就学前の全ての子どもに適用されることとなった (ただし、4歳以上は3歳以下のきょうだい児がいる場合に限る; Salminen, 2017; Fjällström, Karila, & Paananen, 2020)。ここで注目すべき点は、施設による幼児教育だけでなく、家庭で就学まで保育をするという選択肢が設けられていることである。その場合は、家庭での保育が保護者の「労働」と見なされ、国レベルで手当てを支給するシステムが整っている (Fjällström et al., 2020)。1973年に制定されたAct on Children's Day Care (幼児教育施設法) 以降、フィンランドの幼児教育施設はMinistry of Social Welfare and Health (社会保健省) の管轄下に置かれてきたが、2013年にMinistry of Education and Culture (教育文化省) の管轄に移行し、2015年には新しくEarly Childhood Education Act (幼児教育法)

## 言語景観からみる子どもの言葉の発達を促す教育環境 — フィンランドの幼児教育現場からの示唆 —

矢田 明恵\*

Analysis of linguistic landscape to facilitate child language development:  
An example from Finnish early childhood education

Akie YADA

### 1. はじめに

日本では、平成29(2017)年3月に「幼稚園教育要領」の改訂版が告知された。これは、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」および「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3法令が初めて同時に改訂(定)されたものであり、三つの幼児教育施設において、同質の幼児教育・保育を保障しようとするものである(片山・伊藤・馬場, 2020)。無藤(2018)によれば、今回の3法令同時改訂(定)には、いくつかのポイントがある。一つ目は、満3歳児以上の幼児教育施設について、そのねらいと内容を共通にし、本来学校ではない保育所においても、幼稚園と同等の質の幼児教育を行うことを目指すものである。二つ目は、学校教育との接続を明確にしたという点である。乳児期から18歳、さらにその先へと成長する力となる3つの柱(知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等)を幼児教育と小学校以降の学校教育で共通に表し、幼児期にふさわしいやり方で、学校教育への土台を作ることが求められている。さらに無藤は、環境を通しての教育(保育)の重要性を強調している。幼児にとっては、環境で出会う全てのものが「教材」であり、その環境は保育者と幼児の間の十分な信頼関係を基盤とし、幼児が安心して、主体的に環境に関わることができるよう努めなければならない。子どもが環境へ積極的に参加し、子どもの発想が環境に生かされて初めて、学びが生まれるのである(無藤, 2018)。

以上を踏まえて、本稿ではフィンランドの幼児教育施設において、特に子どもの言葉や思考の発達を促す教育環境がどのように創造されているかを明らかにしようとするものである。本研究が数ある諸外国の中でフィンランドに着目するには三つの理由がある。第一に、今回の3法令の改訂(定)は、世界的に幼児教育を重視する流れが加速していることに沿った形と言われているが、フィンランドを含む北欧諸国は、すでに1970年代からEarly Childhood Education and Care (ECEC: 幼児教育と保育)を重視する政策を行ってきた(Karila, 2012)。特にフィンランドは、他の北欧諸国に先んじて1996年に全ての就学前の子どもに幼

\* (やだ あきえ) ユヴァスキュラ大学教育・心理学部

子ども学の

# ひろば

お便り

POST

## ◆私の「カルチャー・いんふお」◆

「78歳で“男”から“女”へ」

「僕が性別“ゼロ”になった理由」(2020年NHK)。主人公は自分の性に違和感をもち20歳で性転換をした小林空雅さんですが、ここでご紹介するのは八代みゆきさんです。小林さんは男性になった自分にも違和感を拭えず、男性女性の二者択一に疑問を感じ、どちらでもないかと自認しています。番組で小林さんがインタビューした一人が八代みゆきさんです。

1925年生まれの八代さんは1944年に東京音楽学校(現東京藝術大学)に入学します。男は兵隊になってお国に尽くすものという時代に音楽の道を選んだのは、性同一性障害という定義がない中、幼い頃から美しいもの華やかなものが好き、男の子と遊ぼうとすると身構えて苦しかった自分をなんとかカモフラージュするためだったようです。近所の教会のパイプオルガンを聴くと、家族の期待に沿えない苦しみ、悩みを忘れられました。1944年には通信兵として従軍もしました。

戦後はチェロを米軍のパーティーで演奏し、1950～60年代はFEN(米軍極東放送網)でオーケストラを指揮、47歳で大学教授に招かれました。1956年には同志のような音楽家、安子さんと結婚しました。大学を退官した後、初めて自身の性の違和感を安子さんに伝え、78歳で戸籍上も女性になるためにタイで手術を受けます。女性となった八代さんは安子さんと養子縁組を結び、共に暮らしています。

映像では男性だった学校時代の同級生とのクラス会を写しています。八代さんをそのまま受け入れる人、どうして女になったんだと疑問を呈す人それぞれです。音楽に性別はないと八代さんは晴れやかに語ります。

参考：映画『ぼくが性別ゼロに戻るとき』(常井美幸監督 2019年) (AK)

## ◆「倉橋惣三協会」と『幼児の教育』◆

昨2020年6月、「倉橋惣三協会」(一般社団法人)が設立され、本誌の企画・編集にも支援的にかかわることとなりました。同協会の目的は、倉橋惣三の「育ての心」の精神を拠り所として教育・保育関係者の相互交流や人材育成を図り、保護者をはじめとする一般社会人と協働して子どもが育つよりよい環境を追究するところにあります。倉橋和雄さん(惣三の孫)を中心に、保育施設関係者、保育研究者、会社経営・事業者等、多様な人々と共に領域を超えたアイデアとノウハウを生かし、新しくつながれる場の創造を目指しています。

2021年は『幼児の教育』120周年企画として、お茶の水女子大学において記念シンポジウムを企画していますが、同時に倉橋和雄さんのご自宅に保管されている倉橋のノートやメモ類、写真等貴重な資料の公開も計画しております。今号からスタートした連載『「育ての心」で語りあう～動画を囲んだDX時代のカンファレンス～』は倉橋惣三協会による企画。紙上の平面的な保育記録をITで動く画像へ変換、デジタル世代に実践的な学びの場を提供したいという野心的な一試みです。

立ち上がったばかりの倉橋惣三協会では、新しい企画、新しい仲間を求めています。ご関心のある方は協会ホームページにアクセスしてください。本誌記事については、下記メールアドレスまでお問合せください。  
yujji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

倉橋惣三協会ホームページURL：  
sozo-kurahashi.or.jp

\*協会のロゴマークは  
子どもの日の菖蒲の花です。



## ◇ナーサリーこぼれ話◇

### 「新しい自分になる」

年度末までひと月余りとなった頃、事務スペースにいる私（主任）のところに「お願いしま〜す」と2歳児担任が手をつないでKを連れてくる。「どうしましたか？」と聞くと、「こっちの爪がここに当たって痛い」とK。なるほど、足の親指の爪が四角く伸びて、人差し指の肉に当たって痛いらしい。

「切りましょうか？」「うん」「パッチンで切るほう？ チョキンで切るほう？」「パッチン」「わかりました」。あえてうやうやしく答えて私は保健用品の引き出しからニッパー式の（普通の）爪切りを取り出し、「これですね。床に座りますか？ お膝にしますか？」と問う。「お膝」と迷いなくKは言い、向こう向きに膝に乗り、神妙に足元を見ている。準備は万端。いつの間にかすっかり大きくなったKの右横から体をよじってのぞき込むようにしないと、Kを膝に抱いた私にはKの右足の爪先が見えない。どうにかこうにか爪のとがりを切り終える。Kは右側からバツと振り返り、私と目を見合わせて「へへっ」と笑い、立ち上がってピュンと保育室に戻っていった。

その日からKは、何度となく私に手や足の爪を切ってもらいに来るようになる。そしてそのたび、膝に座って右や左から私を振り返って、まだまだ幼いままのおどけた笑顔を見せては“持ち場”に戻っていく。2度目3度目こそ、「え？ また？」と思ったが、その後はもう、「はいはい、どうぞどうぞ。いらっしゃいませ」状態だ。私も担任も、よくもそう切ってほしいところを見つかるものだと思ったり感心したりしていたが、その後、何がどう展開して子どもたち大人たちがどんなふうだったか、詳細を振り返ることもないくらいにバタバタと、3月は終わっていった。

爪は、間違いなく自分の身体に属する（というか身体を構成する）ものであるが、他の細胞各所と異なり、ある程度の“意志”をもって「切り離す」（あるいは「切ってもらう」という、とてもよくわかる形で、本体（自分の身体そのもの）から離されていく。そうして、切り離れた分だけ本体は新しい自分になっていく。



ちょっぴり怖がりのKは、優しさや真っすぐさはそのままに、昨日までの古い自分と少しだけさよならをして、新しい自分になって4月からの生活を始めたのだと思う。

（主任保育士K）



## 編集後記

春号の座談会は、『幼児の教育』の120年を振り返り語りあうというもので、私も参加しました。その中で、私は保育者として歩き始めてからずっと『幼児の教育』に支えられてきたということを再確認しました。私は大学卒業後すぐに保育の現場に入りました。子どもと過ごす日々は楽しく喜びの多いものでしたが、同時に悩みも多くありました。目の前の子どもの姿が見えなくなり保育に行き詰まるというスランプに襲われたときに『幼児の教育』に手が伸びました。ページを開くと津守先生の文章が目に入り、読み進めると、自分の中の気負いのようなものがずっと消えて、もう一度子どもに向きあおう！と思ったことを覚えています。

私のような保育者が日本中にたくさんいるのではないのでしょうか。『幼児の教育』は迷える保育者にとって必要な雑誌です。これからも保育者や子育て中の方々へ向けての発信を重ねていきたいと思います。

2021年春号が皆様のお手元に届く頃、日本、そして世界はどうなっているのでしょうか。新型コロナウイルス感染の拡大はなかなか止まりませんが、感染対策として消毒や換気の徹底、3密を避ける行動など、取るべき行動が明確になる中、懸命の努力が重ねられています。保育の場でも子どもたちと一緒に「私たちはできる!」「こうしていれば大丈夫!」と言葉に出しながら日々を過ごしています。心の元気を保ちながら一歩ずつの日々です。(MA)

## 次号予告 幼児の教育夏号 2021年7月刊行予定

創刊120周年。歴史を生かし「今」の保育をどうするか。

◇ 『幼児の教育』120年。未来に何をつなぐのか 2

座談会 子どもにとっておもちゃとは？

丸山素直氏・花牟禮瑠実子氏・柳 奏子氏・私市和子氏 ほか

◇ 承認不安時代の子育て 山竹伸二氏

◇ 海外の保育

タイ、ブータンでの生活経験から 太田孝輔氏

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

## 幼児の教育 春号 第120巻 第2号

令和3年4月1日発行

編集発行人／浜口順子

編集担当／田中恭子

発行所／お茶の水女子大学

『幼児の教育』編集委員会

〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学

浜口順子研究室内

youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

発売所／株式会社フレーベル館

電話：03-5395-6604 (編集)

振替／00190-2-19640

印刷所／図書印刷株式会社

定価／本体880円+税

◎お茶の水女子大学『幼児の教育』編集委員会

2021 Printed in Japan 無断転載禁止

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

編集委員／上坂元絵里

菊地知子

久保健太

松島のり子

宮里咲美

お茶大3園合同研究会

(附属幼稚園、

いずみナーサリー、

文京区立お茶大こども園)

編集協力／フレーベル館

第120巻第1号(冬号)の発行日に間違いがありましたので訂正します。

(誤) 令和3年4月1日→(正) 令和3年1月1日

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613 (営業) ●

